

「*****」(私を抱きしめなさい。頑張って力を振り絞って、そう、両手で私の肩を抱き締めなさい。思い切り抱き締めるのよ。私とやっていると想像しなさい。良いわね。一番気持ちの良い、喜びの中に浸っているのよ。ずっとずっと)

ガブラは良く動かない両手を必死に動かして祐子を抱き締めた。首を動かすこともできない。祐子はガブラに口づけした。亜希子は顔色が変わった。相手は重度のH I V感染者なのだ。祐子にエイズが移ると思った。祐子は瞑想状態になった。男の身体はいたるところでH I Vウイルスの攻撃を受けている。祐子は自分にプラナを注入し、それを檀中からガブラの檀中を通して身体全体に注入した。大波が引く勢いでH I Vウイルスが消えていった。祐子はプラナの注入を続けた。喜びの意識がガブラの身体全体に漲ってきた。祐子はガブラの腹部を透視した。肝臓の半分以上が癌細胞で硬化していた。癌は肝臓だけではなく。肺にも、膵臓にも転移していた。祐子は細胞達に語りかけた。「あなた方はこの男を元に戻すために努めなくてはいけない。この男には、今世でやり遂げなければならないことがある。あなた方と共に生き抜かなくてはならない。直ぐに元の状態に戻りなさい。自らが誤った形態に変化してしまったことを自覚したら、自己消滅アポトーシスのプロセスに入りなさい。あなた方の意識は正常な形に戻って受け継がれます」祐子は強く意識した。自分の背中に回しているガブラの手に力が入ってきたのが分かった。ガブラは祐子を力強く抱きしめた。ガブラは自分の手が思い通りに動くことに気付くと、いきなり、祐子の背中から手を外し、祐子の胸のボタンを外した。祐子の乳房が露わになった。祐子は黙っていた。ガブラはボタンを2つ外し、祐子の胸の中に手を差し込もうとして止めた。ガブラの目に涙がこぼれ落ちた。ガブラは祐子の肩に両手を当て、祐子の身体を自分から離れた。

「*****」(あなたは、どなたですか?)

「*****」(わたしはあなたよ。もう大丈夫よ。全部良くなったわ)

「*****」(これから、俺はどうしたら良いのか教えてください)

「*****」(あなたは、ただ精一杯生きれば良いのよ。この美しい

世界の中でね)

ガブラは起き上がり、床に座り、頭を床にすりつけた。祐子は軽く頷いた。亜希子の目に涙が流れた。モンジャル老翁の瞳も潤んでいた。

祐子は次の患者、少女の側に寄った。

「*****」(あなた、ひとりぼっちなのね。今一番したいことは何?)
娘は俯いたまま暫く黙っていたが、祐子が娘の手をそっと取って、掌でゆっくり手の甲をさすってあげると、娘の唇が動いた。

「.....*****」(おかあさん)

ムバンラクが言った。

「*****」(ミンミ、話せるじゃないか。ミンミが話したぞ)

祐子はミンミの肩を優しく抱き寄せて言った。

「*****」(お母さんに会いたい?)

ミンミは黙って頷いた。目に一杯涙を溜めている。祐子は亜希子の方を流し観た。亜希子は頷いた。亜希子はミンミの近くに来ると、ミンミの頭の側に落ちている髪の毛を一本拾い、瞑想状態に入った。意識を髪の毛の細胞を通り抜けて幽界におもむかせた。ミンミの母親は既に亡くなっていて、娘のミンミから意識を逸らすことができず、幽界の中を彷徨っていた。その念の強さは現世のミンミの意識に作用して、彼女の心を母への思いに縛り付けているのだった。亜希子は母親に対して、いつものように日本語で話し掛けた。

「あなたはもう、亡くなっているんですよ。亡くなった人は、霊界に戻らなくてはいけないんですよ」

「.....あなたは誰?なぜ、私のことを知っているの?」

「私は今、あなたが生きていたコンゴの森の中に居るのよ。そこに、病気のミンミ - そうあなたの可愛い娘さんが居るのよ。あなたのことを思って、言葉も話すことができないみたいなのよ」

「あの娘は私の宝物なの。ああ、私の大好きなミンミ、どこに行ってしまったの?」

「ミンミは森で生きているのよ。あなたの愛情は素晴らしいわ。でも、ミンミを縛り付けてしまっては、ミンミが子供らしく、喜びに満ちて生

きてゆけないのよ。ミンミの為を思うのなら、ミンミの幸せを神様にお祈りして、自分が亡くなってしまったことを受け入れるのよ」

「ミンミに会いたい！ミンミに一目でも会えたら、私はもう消えてしまっても良いわ。私は亭主を軍人に殺され、生きるために身体を売って、ミンミを育ててきたのよ。お客さんには避妊具を使ってもらうようにしていたのに、乱暴な商人に付けないでされて、エイズに感染してしまったの。そんなこととも知らずに私はあの娘をかわいがったのよ。いつもキスしてあげていたの。だから、あの娘にもエイズが移ってしまったのよ。かわいそうなミンミ」

「ミンミは直ぐに治るわ。いまミンミに会わせてあげます。でも、約束してくださいね。ミンミに会ったら、もう彼女を縛り付けないって」

「分かったわ。でも本当に治るの？うれしい！もう心配ないのね」
亜希子は一旦自分の身体に意識を戻した。祐子がミンミの手の甲をさすっている。

「お姉様、ミンミに目を瞑ってお母さんのことを思い出しながら呼ぶように言ってください」

祐子は頷いた。

「*****」（ミンミ、お母さんに会いましょう。さあ、目を瞑ってね。そして、お母さんのことを思い出して、呼んでご覧なさい）

ミンミは目を瞑り、暫くして大きな声で叫んだ。

「*****」（おかあさーん）

亜希子は直ぐに幽界に戻った。母親は亜希子を待っていた。

「さあ、今、ミンミがあなたを呼んでいるわよ。ミンミの姿を思い浮かべてごらんなさい」

幽界の中にミンミの姿が現れた。母親はミンミに駆け寄ると、思い切り抱きしめた。亜希子は一瞬そこが幽界であることを忘れた。ふたりの姿はあまりにもリアルだった。しっかりと抱き合っている手が相手の身体を突き抜けることもない。暫くしてふたりは話し始めた。

「ミンミ、ひとりぼっちにしてごめんね。お母さんは死んでしまったのよ。でもね、いつもあなたの側に居るから安心してね」

「おかあさん、本当にずっと側にいてくれるのね。私、お母さんのことが世界中で一番好きなんだから、私を守っていてくれなくちゃいやよ」ふたりは暫くの間抱擁し合っていたが、やがて亜希子に導かれて、ミンミの意識が自分の身体に戻った。母親の近くにカラフルな衣装を身に付けた黒人の女性が現れ、母親を霊界に連れ去った。亜希子が自分の身体に意識を戻すと、祐子がミンミのエイズの治療をしていた。治療が終わると、亜希子がミンミに向かって言った。

「*****」(お母さんは今、天国に行ったわ。あなたも祐子お姉様に病気を治して頂いて、元気に生きるのよ)

「*****」(はい、お姉様、ユウコママ)

いつの間にかミンミは祐子を母に重ねていた。祐子はミンミを自分の胸に抱き締めた。

その向こうに横たわっているのは40歳ほどの女性だ。祐子が近付くと、女性は直ぐに言った。

「*****」(今度は私を診てくれるのね。ありがたいわ)

「*****」(あなたもエイズに感染しているのね。つらいわね)

「*****」(いつ感染したのか分からないのよ。私はああいうことをされた覚えは無いのよ。結婚もしたことが無いし、ほんとに不思議なのよ)

ムバンラクが言った。

「*****」(サラマリ、本当のことを言えよ。その人に嘘は通用しないぞ。何も恥ずかしがることはないじゃないか)

ムバンラクの横やりを無視するようにサラマリが言った。

「*****」(どうせ私はくだらない人生を生きてきたわよ。さっきまでは、もう生きていてもしょうがないと思っていたわ。だけど、みんなのこと観ている内に、なんだかやる気みたいなものが湧いてきたのよ。だから、私はこれまで汚れの無い人生を生きてきたことにしたのよ。そう決めたのよ。大勢の男に弄ばれたなんてことは、全然無かったことよ。私は働き者のまじめな男を見つけて、これからこの国の平均寿命を延ばすために貢献するつもりなのよ。こんな森の中に何時までも住んでいな

いわよ。いずれは街に出るわ。今は危ないからじっとしているけどね。この人が私のエイズを治してくれるでしょう。そしたら、私は人生をやり直すのよ。初めからね)

祐子はにっこり笑って頷くと、ほんの4、5秒でサラマリのエイズを完治させた。

「*****」(ほんと、不思議だわ。もう、関節も痛くないし、ほら、手も軽々上がる・・・不思議ね。歯茎の血も出なくなってる)

サラマリは左手の人差し指を口の中に入れ、歯茎をしごいてから出して、空中に掲げ見ながら言った。

「*****」(あなた、ユウコさんというのね。いい響きね。あなたが天国を作るとき、私も呼んでね。全てを捨てて駆け付けて手伝わせてもらうわ・・・本当はね・・・私は悪い人間なのよ。亭主を裏切ってしまったの。だって怖かったんだもの。おかげで私は助かったわ。だけどあの人は・・・)

サラマリはそこまで言うと言葉に詰まり、唇を噛んだ。頬を一条の涙が伝わって落ちた。

「*****」(サラマリ、過去の辛かったことは話さなくても良いのよ)

祐子がそう言うと、サラマリは首を横に振って言った。

「*****」(ユウコさん、私に話させてください。これまで、このことは誰にも話していませんでしたが、今は貴女に全てを話してしまいたいのです。貴女なら私の全てを受け入れてくれると思うから)

祐子は頷いた。

「*****」(私たち夫婦は、新しく手に入れた家で夕食を食べていました。そこに国軍の兵士と名乗る5人の銃を手にした男達が、家の中を調べると言って押し入って来ました。亭主は兵士達を恐れ小さくなっていました。彼らは逞しく堂々としていました。それに比べ、小さくなって震えているように見える亭主がみすばらしく感じました。兵士達は家の中を風潰しに調べ、めぼしいもの、ラジオとか磁器の水差しとか、そういったものを証拠品という名目で持って行ってしまいました。亭主

は何も言えませんでした。私は悲しくなりました。長い間働いて貯めたお金で手に入れた貴重な品々をみんな持って行かれてしまったのです。兵士が引き上げて行った後、わたしは亭主を責めました。わたしは間違っていました。それからというもの、亭主は今までの倍も働くようになりました。奪われたものを再び手に入れるため、と言うより自分のふがいなさを忘れたかったのかも知れません。私はそんな亭主がひ弱に見えました。ある日、亭主の留守の時に巡回に来た軍の兵士に、身体を許してしまいました。それからの私は強い男に抱かれることに喜びを感じるようになってしまいました。亭主の居ないときは自分の家で、買い物に外出したときは、兵士の誘い込む安宿で、それも相手が決まっていたわけではありません。私はだんだん兵士達からお金を巻き上げる方法を身に付けてしまいました。そのお金のことで憤った兵士が、一人で私たちの家に押し入りました。私は亭主の目の前で裸にされ、男に弄ばれました。じっと耐えていた亭主はとうとう耐えきれず、震える手で兵士の銃を奪い、兵士を撃ち殺しました。その銃声を聞いて他の兵士が駆けつけました。兵士達は、その現場を見て状況を察したようで、直ぐに亭主を射殺しました。私はあまりの恐ろしさに気を失ってしまいました。どれくらい経ったのでしょうか、気が付くと、私は服を着て銃を手にしていました。目の前に亭主が銃弾に倒れ息絶えていました。私は怖くなってそこから逃げました。逃げて、逃げて・・・・どこかで行き倒れになったようです。モンジャル老翁に救われました。私は今まで、絶対許されないような悪女で生きてきました。身勝手ですが、もし私の命が救われたら、救われたこの命を天国を創るための仕事に捧げます)

サラマリは青ざめ俯いてしまった。祐子はサラマリの肩に手を掛けて無言で胸に抱きしめた。サラマリの目から涙が流れ落ちた。

最後は25、6歳の美しい女性だった。黒人の美人は白人の美人とは異なった、黒ダイヤのような輝きを放っているものだ。まさにこの女性がそうだった。祐子が近付くと女性は壁側に身体を向けてしまった。

「*****」(わたしはユウコといいます。こちらは・・・・)

「*****」(あっちに行ってよ。放つといて。あんたは関係ないわ)

祐子は激しい拒否の言葉を浴びたが、女性の横に腰を下ろしたまま、じっとしていた。祐子は直ぐに女性の体内を透視し、全てのH I Vを彼女の身体から消し去った。女性は身体を丸めて完全に拒否の体制を取った。祐子が振り返ると、モンジャルが小さく首を横に振った。祐子はその女性をそのままにして部屋を出ることにした。外に出ると、もう大分陽が傾いているようだった。ジミーが軽く頭を下げた。祐子はモンジャルに礼を言った。モンジャルは「こちらこそ感謝している」と応えた。

「*****」(ジミー、ありがとう。今日はここまでにしておくわ。みんなの所に戻りましょう。ねえ、ジミー、ソニアのことどう思う?)
藪を掻き分けながら祐子はジミーに尋ねた。

「*****」(はい、元気になったと思います。もう大丈夫でしょう)

「*****」(そうじゃなくて、女性としてどう思うかだけ)

「*****」(はい、料理が上手なしっかりした人だと思います)

「*****」(ソニア、貴方のことが気になるみたいよ)

ジミーは軽く頷いた。分かっているようだと思っただ。

祐子達が茂みを抜けてテントの所に出ると、丁度、ソノンとバンメが槍で射止めた獲物を捌いているところだった。ダイカーだ。ソノンが覗き込む祐子に向かって「イティ」と言った。その晩はソニアの料理に、イティの肉を添えてのごちそうになった。亜希子に附いてメドリスナとアルフォンが、モンジャルの所に15人分のイティの肉を届けた。戻って来た亜希子が言った。

「*****」(丁度2人の男性が狩猟から戻って来たのですが、芋が採れただけだったので、お肉を見てみんな大喜びでした)

その晩は、草原の中央で火を焚き、ピグミー達がそこで肉を焼き、ソニアがスープを煮立てた。その周りに全員で円陣を組んだ。出来上がった料理をソニアとマリーが順に配った。祐子も、亜希子も手伝った。誰もが緊張から解放され食事を楽しんだ。いつの間にかジミーの隣にソニアが座っている。ジミーは素知らぬふりをしていたが、ソニアが人目を気にしながら自分の夕食をジミーに分け与えていた。全員がそこで2時間ほど談笑した。一晩中火を絶やさず、2人の兵士が交替で警備に就くこ

とになった。最初はベムとアルフォンが担当した。2人は銃を手にして、テントの両脇の木の切り株に腰掛けた。話し声が途絶えると、辺りは恐ろしいほどの静寂に包まれた。夜が更けてきて、皆ねぐらに入ることにした。祐子、亜希子、マリー、ソニアがひとつのテントに潜り込んだ。それを見届けてからジミーとメドリスナがもう一つのテントに向かった。ピグミー達も自作の小屋に入った。女性の寝どころは狭い空間だったが、折り重なるようにして横になった。祐子に身体を着けるように横になった亜希子が、祐子の耳元で囁いた。

「*****」(お姉様、「怖れずに楽しみなさい」とおっしゃったけど、わたくし本当に楽しいです)

「*****」(自然の中では本当の自分に帰れるからね)

2人は身を寄せ合って眠りに就いた。亜希子は祐子に寄り添っていることで、恐怖心を覚えることは無かった。夜半、祐子のごそごそという音で目が覚めた。ソニアが外に出て行った。祐子はテントの裾を持ち上げて外を覗いてみた。暗闇の中、ソニアは警備に就いているジミーに近付くとその横に腰掛けた。ジミーはソニアの方を流し見たが、直ぐにまた正面を向いた。2人は言葉も交わさず切り株の上に坐っていた。祐子はほっとして再び眠りに就いた。遠くで獣の遠吠えが聞こえた。

翌朝祐子は人の立ち動く気配で目が覚めた。鳥の鳴き声がする。祐子が起き上がると、亜希子も目を覚ました。マリーとソニアの姿が無い。2人はタオルを手にしてテントを出た。ジミーが切り株から立ち上がった。

「*****」(ジミー、おはよう。警備ご苦労様)

「*****」(おはようございます。ジミーさん、おやすみになったんですか)

「*****」(ママ、アキ、おはようございます。私はよく寝ました。おふたりはおやすみになれましたか?)

「*****」(ええ、おかげで安心してぐっすり眠れたわ)

ふたりの元にボニグ老人が孫のラミリーの手を引いてやってきた。ラミリーはポリ袋を3つ下げて、にこにこしている。

「*****」(昨日は本当にありがとうございました。私の失礼な言

葉をお許してください。あなた様たちは本物の救世主です。この子にこんな頂き物までして、私は神様に何とお詫びしていいかわかりません。知らなかったこととは謂え、あんな侮辱的なことを言ってしまって・・・）祐子が言った。

「*****」（ボニングさん、私は何とも思っていないよ。もう、体の具合はいいのですか？）

ボニングは腕を前に出し、指を曲げたり伸ばしたりしながら言った。

「*****」（この病は治らないと聞いていました。どんなに頑張っても、せいぜい、あちこちの関節がだんだん悪くなってゆくのを、遅くさせることしかできないと。でも、この通りまったく良くなってしまいました。これが奇跡でなくて何でしょう。私は間違っていました。本当に申し訳ありません。それから・・・ラミリー、お話しなさい）

「*****」（わたし、神様にお願いしたの。ラミリーにお洋服をくださいって。お食事が終わってお部屋に戻ったらこれがあったの。とってもかわいいお洋服とスカートとお靴。お姉さん、ありがとう）

ラミリーはにこにこしている。祐子はラミリーの頭を撫でて言った。

「*****」（ラミリー、あなたがおりこうだから、きっと神様がご褒美をくださったのよ。よかったわね）

ボニング老人は深々と頭を下げた。

ふたりは顔を洗うために沢に出掛けた。沢の石の上にマリーとソニアがしゃがみ込んで居た。マリーは身繕いをしていた。ソニアは食事の準備をしている。そこにモンジャルがプリミテと一緒にやって来た。

「*****」（みなさん、おはようございます。昨日はありがとうございました。コンゴの森の一夜は如何でしたか？）

モンジャルに声を掛けられて、皆朝の挨拶を交わした。祐子が言った。

「*****」（皆さんの具合は如何ですか？プリミテ、元気になったようですね）

プリミテの顔は滲刺としていた。身体から昨日は見られなかったエネルギーが迸り出ているのが分かった。

「*****」（ユウコ、アキ、本当にありがとう。みんな元気になっ

たわ。不思議よ。あなた方は森の精なの？ンガンガとアレの化身のようね。私、あなた方は朝になったら消えてしまっているかと思ったわ。夢のような気がするんだもの。だって、死の病エイズをワクチンも使わずに簡単に直してくださったし、ミンミは死んだはずのお母さんに会えたと言っているわ。キルリエも元気になっていて、起き上がっていたわ。まだ一言も口をきかないけどね。ミンミはサラマリを手伝ってタロイモを焼いているわ。死を待つだけの私たちの命を蘇らせてくれた。昨日は興奮して眠れなかった。早く夜が明けないかと思っていたのよ。汚れている身体を清めたかったから。この沢を下ったところに水浴びできるところがあるの。良かったら後で私をご案内します)

プリミテは全く別人のように美しく輝いている。

朝食が済むとピグミー達は狩りに出掛け、男達は防御柵を作ることにした。女性達は水浴びをするためにプリミテに従って沢を下った。サラマリとミンミも附いて来た。10分ほど下ると周りが木々で覆われた淀みが現れた。プリミテ、サラマリ、ミンミの3人は身に着けていた汚れた衣類を脱ぎ去り、それを水で洗ってから木の枝に干し、直ぐに水に入った。マリーとソニアは服を脱ぐのを躊躇していた。祐子が衣類を脱ぐと、亜希子も思い切って裸になった。ふたりの裸を見て3人の女性達が何か言っている。祐子は亜希子の身体を見て可笑しくなった。

「アキ、色が剥がれて、肌の色がまばらになっているわよ。ふふふ」

亜希子は祐子を見て言った。

「お姉様も背中が白くなっているわ。ほっほっほっほ」

ふたりは見られないように、直ぐに水に入った。ソニアとマリーは裸にならず、タオルに水を含ませて身体を拭っていた。ミンミはうまく泳げないようで、ばたばたと音を立てている。その時、サラマリが悲鳴を上げた。よく見ると淀みの奥の草陰から体長3メートルほどのワニが女性達の方に向かって泳ぎ出してきた。サラマリは直ぐに陸に上がろうと、必死に泳いだ。プリミテがミンミの手を引いて泳ごうとしたが、ミンミにかじりつかれて水を飲んでしまい、2人とも溺れてその場で手足をばたばたさせはじめた。ワニはスピードを上げてふたりに近付いて来た。

巫希子は急いで水から上がった。祐子はその場で立ち泳ぎしながら、ワニに向かって大声で怒鳴った。

「やめなさい、あっちに行きなさい」

ワニは無視するかのようにそのまま直進して来る。あと1メートルにまで迫ったとき、祐子の意識がワニを貫いた。ワニはその場でのたうち回り、悶え、苦しみ始めた。茂みの中から何本もの槍がワニめがけて放たれ、その中の1本がワニの目を射貫いた。祐子は直ぐにプリミテの側まで泳ぎ、気を注入して意識を目覚めさせた。プリミテは落ち着きを取り戻し、必死に岸に向かった。祐子は水を飲んであっぷあっぷしているミンミの顎に手を掛けて岸まで泳いだ。全員が岸に上がることができた。祐子はミンミに人工呼吸をして水を吐き出させると、急いで服を身に着けた。茂みの中から5、6人の身体の小さな男達が姿を現した。女性達は身構えたが、男達は女性達には興味を示さず、皆、一斉に水の中に飛び込み、射止めたワニを取り押さえに掛かった。ピグミー達だった。ピグミー達は捕獲したワニを岸に引き上げていた。祐子が大きな声で言った。

「ありがとう。助かったわ」

日本語なのに、ピグミー達は祐子に振り向き微笑んで手を振った。プリミテは意識の戻ったミンミを抱き締めている。サラマリもふたりの肩に手を掛けて喜びを分かち合った。マリーが言った。

「*****」(ママ、無事で良かったです。やはり、アフリカは怖いですね。でも、絶妙のタイミングでしたね)

「*****」(本当ね。ピグミー達に感謝しなくちゃ)

サラマリが言った。

「*****」(槍が当たる前に、ワニは苦しがつてもがきだしていたわ)

女性達は祐子の顔を見詰めた。ソニアとマリーは背筋が寒くなるのを感じた。

モンジャル老翁は祐子に戻るのを待っていた。祐子の顔を見ると近寄って来た。

「*****」(水を浴びてさっぱりしましたか?)

「*****」(はいとても気持ち良かったです。でも、あの辺りにはワニがいるんですね。ミンミが危なかったんですよ)

プリミテに手を引かれながら沢から上がって来るミンミの姿が見えた。

「*****」(それで、ミンミは大丈夫なのですか?)

「*****」(ええ、この辺りに住んでいるピグミーの人たちでしょうか、槍でワニを射止めてくれました。ミンミも水を飲みましたが、大丈夫です)

「*****」(それは良かった。ここはジャングルですから、いつも細心の注意をしていないと危険です。でも、みんな無事で良かった。ところで、今日はある男に会ってもらおうと思ひましてね)

「*****」(はい、分かりました)

祐子はそれが誰かとも聞かなかった。ここに居る人達全員に会って話を聞いたかった。モンジャル老翁は祐子1人を伴って一番奥の小屋に向かった。ジミーが後に従ったが、入り口で待つようにモンジャルに言われ、やむなくその場で警備の体制を取った。そこは入り口を草が覆っていて、入りにくい小屋だった。草の覆いを払い除けるようにして中に入ると、中はこれまでの小屋とは全く違った空間だった。周囲は磐で覆われていて、まるで洞窟のようだ。突き当たりに他の部屋にあるような手製の木の枝と葦で作られたベッドが置いてある。モンジャルはベッドを横に避けて、突き当たりの磐を手で押した。すると磐が右側にスライドして、そこから地下に通じる勾配の緩い階段が現れた。モンジャルはベッドと磐を元に戻し、その階段を下りた。不思議なことに下に向かっているのに周囲があまり暗くない。祐子は所々に採光の仕組みが組み込まれていることに気付いた。途中で階段は二手に分かれた。モンジャルは右手の狭い階段の方に曲がった。暫く階段を降りて行くと今度は木のドアに突き当たった。モンジャルがそのドアをノックした。3回早く打ち、2回ゆっくり打って、また3回早く打った。ドアが開いて男が顔を出した。男は無言で頷いてモンジャルと祐子を中に導いた。祐子は鼓動が激しく打ち始めたのを感じた。その男は顔かたちこそ同じではないが、バラッ

クにそっくりな体型のがっしりとした男だった。短パンを穿き、素肌に薄手のTシャツを着ていて、逞しい身体の線がはっきりと浮き出ている。顔立ちはバラックよりずっと穏やかで、黒人にそぐわない切れ目で鼻が高く、顔の長い男だった。そこは事務所のような広い部屋だった。周囲は磐で囲われているが、岩肌は平坦な壁に加工されている。床も綺麗に仕上げられている。奥にはやはり木の枝と葦で作ったベッドが置いてあった。壁には大きな世界地図、アフリカの地図、コンゴの地図の3枚が貼り付けられている。地図上に沢山の赤い丸印が記入されていて、丸印の側に単語が記入されている。特にコンゴの地図は赤丸で埋め尽くされていた。部屋の中央には2メートル四方ほどの木のテーブルがあり、その上に書類が山積みされている。モンジャールが男を指さして言った。

「*****」(ユウコさん、こちらがウグング・ボンリガンボです。ウグング、こちらが昨日話したユウコさんだ。まるで神のような力をお持ちだ。おまえと同じように、このコンゴを天国のような国にしようと考えていらっしゃる方だ。きっとおまえの計画を助けてくれるはずだ)ウグング・ボンリガンボと紹介された男は右手を出して祐子に握手を求めた。祐子は会釈をしてその手を握った。

「*****」(自分はこの国を世界一の国にしようと考えている。いや、次はアフリカの時代になると信じているから、その準備を始めている。モンジャールが紹介したのだから、貴女を全面的に信用する。今まで、この奥の事務所にまで足を踏み入れた村人は居ない。それは、ここがコンゴの人々を救うことのできる唯一の秘密の拠点だからだ。だが、今はまだどんなに身近な人にさえも知られては困る)

祐子はその男に不屈の意志を感じた。男の目はあらゆるものに対する鋭い洞察力を秘めているようだった。祐子は言った。

「*****」(私はユウコ・ツグンショウです。キガリでフルマを運営しています。アフリカの国、特にこのコンゴに住む人々はあまりにも悲惨な運命を背負わされているので、それを何とかしたくてここにやって来ました。先ず、実際に苦しんでいる人たちの元を訪れて、自分の認識していることが事実と違わないかどうかを確かめたかったのです。そ

れから、次に進むべき道を見つけようと考えていました。まさか、こんなところで、あなたのような志をお持ちの方に出会えるとは思いませんでした。私はなんと恵まれていることかとしみじみ感激しています) ユウコはウグングが、心なしか涙ぐんだように感じた。

「*****」(やはり、あなたがママユウコでしたか。昨日モンジャルから話を聞いて、もしやと思っていました。一度お会いしたかった。ここでこうして巡り会えて私は幸せだ。あなたのことはバラックから何度も聞かされてきました。あいつとは共にアフリカの変わって行く姿を見るまで頑張ろうと誓い合っていた。あいつは最後まで見届けずにこの世を去ってしまったが、我々は必ずこのコンゴ、いやアフリカ全土に陽を当てて見せる。地球上にこれほど素晴らしい大陸はない。人類の誕生の地だ。溢れる強い日差しと、沢山の生き物を育む大自然、そして心優しい人々。一時西欧諸国の我欲に蹂躪されたが、もうああいう蛮行はできなくなった。未だに、扇動、洗脳された状態から抜け出せていない頭の弱い者達も大勢居るが、大半はもともと平和を望む優しい心の持ち主だ。西欧諸国による足かせが外された今立ち上がらなくて、何時立ち上がれると言うのだ。俺はバラックとよく話したものだ。あいつが逝って、おれも一時は落ち込んだが、バラックの話していたママユウコ、あなたのことを思い出して勇気を奮い起こした。俺たちはずいぶん前から世界中の誰も知らない地下組織を作っている。この組織はアフリカ全土に広がっていて、その時が来るのを待ち構えている。この国やブルンジ、ルワンダ、スーダンなどの大殺戮で、ずいぶん沢山の仲間を失ってしまった。それでもまだアフリカ全土に3万人は居る。この国だけでも2000人ほどの仲間が居るのだ。俺たちは大きな拠点は持たない。この国では主要都市の地下、そしてこういう街の外れにある誰も近付かないような森の中に隠れている。ここは、最も古い拠点のひとつだ。モンジャルが難民達を連れて来るまでは、ピグミーにさえも気付かれることの無い場所だった。俺たちはここで着々と準備を続けている)

祐子は驚いた。こともあろうに、こんな場所にバラックの仲間の潜んでいる秘密の拠点があろうとは夢にも思わなかった。祐子は言った。

「*****」(私は天の意志に導かれてここにやって来たのだと思います。あなた方に会うために、そして共にこの国を正常な国に戻し、更に平和な天国にするために)

モンジャル老翁がどこかから椰子の実を割って作ったカップを持って来て、書類を横に押しやりながらそれをユウコに渡した。カップには椰子の実の汁が満たされていた。ユウコはにっこり笑ってそれを啜った。一口啜ってから、それをウグングに渡した。ウグングもそれをぐいぐいと飲んで、モンジャルに返した。モンジャルは残りを飲み干した。

「*****」(モンジャル老翁、ありがとう。そうだ、みんな食事をしたのかしら?)

「*****」(いや、まだです。みんなあなたを待っています)

「*****」(ウグングさん、食事はされたのですか?)

「*****」(いいえ、私は朝食はモンジャルのくれたような果物の汁を飲むだけです。みんなが待っているでしょうから、一旦戻って、もう一度ここに来てください。その間に、あなたにお見せできるものを用意しておきます。あなたと共に戦うために……)

祐子は頷くと直ぐにみんなの所に戻った。昨夜と同じ場所に仲間達全員の他、村の人たちも加わって大きな円陣が組まれていて、食事の支度が調っていた。全員がモンジャルと祐子が戻るのを待っていた。亜希子がにこにこしながら自分の横に祐子を招いた。モンジャルは村人達の間に入った。モンジャルが言った。

「*****」(皆さん、ようこそ我々の村にお越しくださいました。ママユウコという慈悲に満ちた方とのお仲間の方々が我々と共に過ごして頂けるようになったことに対して、森の精霊に感謝の祈りを捧げ、朝食を頂きましょう。今朝は隣村のピグミーの皆さんが獲れたばかりのワニの肉を持って来てくれました。ワニ肉のスープとフフ、タロイモをみんなでいただきます)

皆、次に祐子の言葉を待った。祐子は立ち上がって頭を下げたから言った。言葉は思考を介さずに流れるように口から出てきた。

「*****」(皆さん、私たちはここに来る前に軍の戦闘に翻弄され

るコンゴの皆さんの姿を垣間見させて頂きました。貧困がこの国全体を飲み込んでいるように感じました。これからはできる限り、苦しんでいる皆さんの支援をしたいと考えています。私はこの地でその階^{きざはし}を垣間見ました。この国は必ず蘇ると信じています。お腹が空いたでしょう。モンジャル老翁と私のことをお待ちになって頂き、ありがとうございます。さあ、それではスタミナの付きそうな朝の食事を頂きましょう) 快活なざわめきの中での朝食会だった。

「*****」(お姉様、モンジャルさんとどちらに行っていたのですか?)

「*****」(奥の家よ。あとであなたも一緒に附いて来てくれるかしら)

「*****」(はい、わかりました)

亜希子は祐子の話し方から、そこが秘密の場所であることを察した。以降その話題には触れなかった。

「*****」(お姉様、このワニのスープはとっても脂ぎっていますわね)

「*****」(今朝、ミンミを襲おうとしたワニでしょう。とうとうスープになってしまったのね)

「*****」(あのとき、お姉様が叫ばれたのに、このワニはお姉様を無視しました。でも、その後、突然ひっくり返ったでしょう。ピグミーの槍が当たる前だったように見えたのですが、お姉様がなされたのですか?みんなが「そうだ」と言っています)

「*****」(私は、ワニの突進を止めただけよ。それだけよ。ワニは自分でひっくり返ったのよ。本当よ)

「*****」(それは、やはり、お姉様が、ワニをひっくり返したことになるのではないのでしょうか?)

「*****」(私は、意識が一点に集中すると、どんなことも自分の意志で動いているということがはっきり分かるのよ。あの人がいつも言っていることなのね。それが実際に自分に起こるのよ。あのワニが迫ったときもそうだった。それは誰にでも起きることだと思わ。だから意

識を正しい方向に向けないと大変なことになるということが分かるのよ)

「*****」(やはりそうでしたか。私にはまだとてもそんなことはできません)

食事を終わると、モンジャルが祐子の近くに来た。祐子は亜希子を伴ってモンジャルの後に従い、再びウグングを訪れた。ジミーが後に従った。奥の部屋に入ると、ウグングが祐子を待っていた。祐子は先ず亜希子を紹介した。ウグングはモンジャルから話を聞いているとあって、亜希子に対しても敬意を表して丁寧な挨拶をした。

テーブルの上には大きなバズーカ砲のような武器と機関銃、それに2冊のファイルが置かれている。

「*****」(ママユウコ、こいつをご存じですか。結構すごい力があるんです)

「*****」(それはもしかしたら、手動のミサイルじゃないですか?)

「*****」(さすがにバラックの女房だけのことはあります。MANPADという、手動地对空ミサイルです。我々はこのミサイルを各国の支部に2台ずつ配備しています。その時が来たら、一斉に蜂起し、独裁者を襲撃することになっています。勿論それだけで独裁政権を倒せる訳ではありません。それと同時に民衆の蜂起が必要なのです。これは非常に難しい。どうやってやったら良いのか現在模索中です。ひとつの方法として、インターネットを使うという手がありますけど、そうすると事前に襲撃の計画が独裁政権側に漏洩して、我々の組織は掃討作戦の標的となり、根こそぎにされてしまう危険性があります。だから迂闊にインターネットは使えません。何か良い方法があったら教えてください)

「*****」(その地对空ミサイルは、あのルワンダ大統領ジュベナール・ハビヤリマナと同乗していたブルンジ大統領シプリアン・ンタリャミラが飛行機の撃墜で同時に死んだときに使われたと謂われるミサイルですか?)

「*****」(形は同じですけど、最近のPCでよく使われているペルチェ素子を使ってシーカーを冷却し、レーザーと超短波を使って攻撃

可能範囲を拡大させ、的中確率を高めてあります。失敗は許されませんがね)

「*****」(ウグングさん、勿論独裁政権を民主政権に変えることが和平への第1歩だとは思いますが、このような武力による革命のような形態を取ると、その後で必ずその反動がくると思います。私はできるだけ、武力を用いなくて平和裏に民主化を図りたいと思っています。過去の例からしても、民主化と銘打ってクーデターを起こし、政権奪取を実現しても、そこに確固たる理念と国民に対する強い愛情がなければ、新しい政権は直ぐに以前の独裁政権と同じようなことし始めてしまうと思います。それは、暴力を使って現政権を討ち滅ぼすことによって、自ずと自分達自身の中に自己過信と傲慢さが現れてきて、挙げ句の果てにその傲慢さが自分達を蝕んでゆくからだと思います。ですから、私は防衛以外の目的で武器を用いることは極力避けたほうが良いと思っています)

「*****」(あなたの行動パターンについてはバラックから何度も聞いて知っています。あなたが対話や慈悲溢れる行動で人々の心を変えて行くことができることは知っています。でも、相手は一国の元首である大統領です。そしてその結果を及ぼすのはその大統領が治めていた国全体です。強制力無しで変革するには大きすぎると思いませんか?)

「*****」(私は、愛と信念が国全体を、強いては世界全体をも変えうると確信しています。寸分も疑ったことはありませんし、アフリカに来てから、そのようにやろうとして、できなかったことは一度もありません)

「*****」(確かに、強い確信をお持ちのようですが、それでは、例えばこのコンゴを変革するのに、手始めに何から始めるつもりですか?)

「*****」(ウグングさん、私もあなたと同じように、大統領を変えるところから始めたいと考えていますよ。でも、現在の大統領を武力攻撃するのではなくて、変革を促すのです。元々大統領になろうというほどの人間ですから、心が真っ黒ということはないと思うのです。実際

そんな悪一点の人間はこの地上には存在しないと思います。ですから、その僅かな正義心を誘導して負の極まで落ちている状態を一気に正の極に変革するのです。負が強ければ強いほどその変革は劇的に起こると思っています。その起爆剤をどうするかですが、武力を使わずに達成させるのです。私の頭の中に画期的な方法があります)

ウグングは目を剥いた。巫希子とモンジャルは聞き耳を立てた。昨日祐子から聞いた、「思いによってこの世界を変える」という言葉を思い出し、それが変化したのだろうかと思った。ウグングが言った。

「*****」(もし、よろしければ、もう少し具体的に話して頂けませんか?)

「*****」(分かりました。これから私の話すことは、夢物語ではありません。現実実現可能な話です。私が説明する内容に疑問を感じたら遠慮せずにそう言ってください。わかりやすく説明しますから。先ず、前提として2つの新しいマシンを思い浮かべてください。1つは、既に死んでしまった人と会話のできるマシン、もう一つは自分の手元にある品物を、即時に特定の場所に転送できるマシンです。この国の元首である大統領の変革はこれらの2つのマシンを活用して実現させるのです)

ウグングが右手を少し挙げ、疑問があるという意思表示を示した。祐子は話を中断した。

「*****」(その死んだ人と話のできるマシンというのは、現実にあるマシンなのですか?)

「*****」(勿論です。後であなたにご覧になって頂きます)

「*****」(それから、品物を即時に転送するマシンは?)

「*****」(それも既にあります。日本の中にしかありませんが、アフリカ変革の為に必要であれば、手に入れることはできます)

「*****」(申し訳ありませんが、それがどんなマシンなのか、イメージすることはできません)

「*****」(分かりました。それでは、今からデモンストレーションを行いましょう。そうすることで、私の話が理解し易くなるでしょう)

祐子はそう言うと、直ぐに瞑想状態に入り、賢にテレパシーを送った。日本はまだ未明である。しかし賢は直ぐに応答し、前回同様OVSを1台転送してきた。ウグングは驚愕し、2、3歩後ずさりした。モンジャルは驚いて尻餅を着いてしまった。亜希子は只じっと祐子の所作を見詰めていた。転送されてきたバッテリー式のOVSを前にして祐子が言った。

「*****」(今、1つのマシン、物質を転送するマシンの実演をしました。この品物は、OVSというマシンで、つい先ほどまで日本にあったものです。日本の物質転送マシンが、このOVSというマシンをここに転送してきたのです。ここまでは了解できましたか?)

ウグングは怖れを抱きながら、ゆっくり頷いた。モンジャルはまだ呆然としている。祐子は亜希子を促して、OVSのセットアップをさせた。

「*****」(ウグングさん、あなたの親しかった方でどなたか最近亡くなった方はいらっしゃいませんか?)

祐子が訊くと、ウグングは頷いた。

「*****」(つい最近、3人の友人が亡くなりました。沢山の仲間も亡くしていますが、それは少し前です。3年前には妻も亡くしました)ウグングは悲しそうな目つきをして応えた。

「*****」(今から、その中の一人とこのマシンで会話してみてください)

「*****」(えっ? どういうことですか? 彼らの生きているときの記録をこのマシンで呼び出せるのですか?)

「*****」(いいえ、既に亡くなっている現在のあなたのお知り合いの方とお話することができるのです)

「*****」(そっ、それは、私には理解できません。死んだものの魂は遠い星空の彼方に赴くか、精霊になって森に住み着くかだと聞いています。と謂うことは、このマシンはシャーマンの機能を持っていると謂うことですか?)

ウグングが恐怖に襲われていることがはっきり見て取れた。

亜希子の誘導で、ウグングは一人の兵士の格好をした男とOVSで会話

した。ウグングは涙を流しながら、しかし冷静さを保って会話を続けた。OVSの画面上に現れた男は、ウグングの声が自分の頭の中に聞こえることを理解できないようだったが、ウグングの説明で自分が既に死んでしまっていることを覚ると、はじめの内はうちひしがれた様相を呈したが、直ぐに落ち着いた口調に変わっていった。一人の男との会話が済むと、ウグングは残りの2人とも会話をしたがった。祐子はそれを受け入れた。巫希子の誘導で話をする事ができると、ウグングはもうそれ以上要求することはなかった。妻との会話を望もうとしないウグングに、祐子は一抹の哀れさを感じた。

OVSのデモが終了すると、祐子は賢とテレパシーで会話し、マシンを引き上げてもらった。

「*****」(驚きました。申し訳ないですが、私は「どうせまやかしだろう」と思っていました。しかし、あのマシンが真実のマシンであることを知りました。まるで夢のような感じがします。2つのマシンが実際に存在することを理解致しました。ママユウコ、お話の続きをして頂けますか?)

「*****」(変革をさせる相手に、これらのマシンの存在を知られてはまずいと思います。日本でも、マシンの販売時に制約を設けて、管理を徹底しています。もし、これらのマシンが危険な考えを持った者達の手に渡ると、どんなことが起きるか知れませんから・・・・では、実際これらのマシンを用いて、何をするかをお話しましょう)

ウグングとモンジャルの祐子に向ける視線が変わった。一言の言葉も聞き漏らさないと言わんばかりに、真剣でかつ畏敬の念に満ちた視線を祐子に注いだ。

「*****」(先ず、変革が必要な大統領宛てに、現在の国民の窮状を知らせ、変革が必要である旨を認めた書簡を送ります。送り主はその大統領の信じている宗教の主神名とします。その書簡には、もし大統領が変革を約束し、実施に移した場合は、その旨を国連に報告するように書き加えておきます。そしてネット上にその書簡の内容を公開します。これを何度か繰り返します。そして、これは最も大切なことですが、そ

の書簡には、1つの宗教上の護符を同封します。その護符の中に、マイクロチップの位置情報確認装置を組み込んでおきます。これはまだ開発できていませんが、まあ、謂わば携帯電話の心臓部のような仕組みですから、現在の集積回路技術では可能だと思います。多分、大統領あるいはその取り巻きの者達は書簡と一緒にそれを処分してしまうかも知れません。それはそれで構いません。唯、普段大統領が居る場所について、できるだけ正確な地球上の位置を把握することが必要です。これはあなたの仲間にやってもらいます。マイクロチップは位置情報を把握するために利用するのです。物質転送マシンはマイクロチップの情報を把握します。もし、直接把握できなければ、あなたの仲間のアジトが中継地点となって、大統領の位置情報を物質転送マシンに送ります。これでお膳立ては整います。何度も書簡を送り、その中で1度でも大統領がそれを読み、反応を示せば、こちらの思うつぼです。これら一連のお膳立ては、大統領の居る正格な位置を常に把握するためのものです。物質転送機が確認したマイクロチップの位置と大統領の位置が一致しているか、あるいはマイクロチップの位置から、大統領の位置を推定できるようになったら、それからは、直接大統領の目の前の空間に手紙と爆弾・・・これは模擬的なものですが・・・それを物質転送機で送りつけます。爆弾は大統領がそこから離れているときに爆発させます。それは人に損傷を与えない程度のもにします。初めは、恐怖と警戒心で大統領官邸内は騒然とすると思います。手紙は頻繁に転送しますが、爆弾は時々送ることにします。大統領が意識を変え、変革を約束するまでに時間が掛かるようでしたら、大統領官邸の外庭に大きな爆弾を送りつけ、それを爆発させます。軍隊も何も必要ありません。それだけで十分だと思います。やり方はいろいろ工夫したら良いと思います。大統領がこれらの一連の行為をある特定のグループの仕業と誤認し、反撃を行う懸念が出てきたときには、直ぐにインターネットとその国の有力新聞紙上に声明を発表し、大統領にその書簡を転送します。大統領および、その取り巻きに対してのこれらのアプローチを続けている間に、行うことがあります。それは国民の心の変化を促す行為です。理想郷に向けて、国全体が始動する為

の準備です。アフリカ全土におよそ100万個の衛星放送受信用のラジオをばらまきます。そのラジオは我々からの衛星放送のみを受信できるプロトコルとフィルターを内蔵したラジオにします。その経費は3年間の実行を仮定しておよそ500億コンゴフランと見込まれます。この資金は私がある方に頼んで拠出してもらいます。静止衛星上に通信の中継装置トランスポンダを確保します。アフリカの何か所かに秘密通信基地を設け、そこから衛星に向けて電波を送信します。リンガラ語だけでなく、いろいろな国の言葉で、「現在の政府が方向性を変えようとしていること」、「国民がこれからしなければならないこと」、「お互いに隣人を大切にするという心を思い出すこと」、「住んでいる国が天国のような国に変化して行く途上にあると意識すること」を伝えます。あなたの仲間達が主な民族の言葉を使ってメッセージを読み上げます。この放送には「天の声」という名前を付けます。これが2番目にすることです。そして、3番目にすること、それはOVSを使って大統領および国民への死者からのメッセージを伝えることです。それは、事前にOVSを使ってあなたの仲間が、大統領の最も怖れる死者、大統領の命令で暗殺した相手や、大統領の既に亡くなっている両親などとコンタクトを取り、その時のOVS上での会話を録画し、そのCDやDVDを大統領に物質転送マシンで送り付けるのです。そして、同時にそれらの映像をインターネット上で放映します。これは最初にこの国で実施し、続いてアフリカ全土の国に対して実施します。私はあなたがたがアフリカの各国に連携できる仲間の組織を持っていると聞いて、心が躍りました。あなた方の組織を用いればアフリカ全土に対して、今までお話したことを実行できるからです。各国の国民に対しては、国民の一番崇敬している、その国の過去の偉人とOVS上でコミュニケーションを図り、理想郷について語ってもらい、それを録音して衛星を経由してブロードキャストします。それが第3弾です。そして、第4弾、これが現実的には非常に大事なことです。あなたの仲間に頑張ってもらわなくてはなりません。あらゆる貧困地域を探し出し、その地球上の正確な位置を割り出してもらいます。そして、そこに物資を転送します。それは私が国連に赴き、

事務総長と面談し、アフリカへの集中的な食料物資支援の約束を取り付け、そしてそれを物質転送マシンで一手に配送することに対する許可を得てきます。次に世界赤十字本部を訪れ、代表と会談し、H I Vワクチンの供給の約束を取り付けます。それが済んだら、本当に食糧不足で窮地に陥っている地域への食料配送、エイズ患者の多発している地域へのワクチンの配布を行います。中間の支援組織などを介在させないので、品物は確実に窮状にある人々の元に転送されます。もともと、アフリカの人々の心はやさしいので、村単位に配送するだけでも目的の大半は達成できると思います。勿論直ぐには変わらないと思います。でも、少しずつ変化するでしょう。私はあらゆる国の大統領や首相に対して、この計画に対する支援の要請を行います。初めの内は馬鹿にされ、無視されると思いますが、いろいろな効果が現れ始めれば、最終的にはどの国も、必ず振り向いてくれると信じています。そういう意味で、最初に最も困難な国、コンゴでの計画実行を絶対成功させなくてはなりません。アフリカの多くの国がエゴを出し合って、この国の混乱に便乗して戦い、あるいは牽制し合っている状況をくぐり抜けてなんとしてでも成功させなくてはなりません。この国コンゴでの成功が鍵になります。大変だと思いますが、是非これを実現させたいと思います。ウグングさん、モンジャールさん如何ですか？・・・改革が軌道に乗り掛けたら、最後に経済的な仕組みの再構築に取り組みます。ある程度アフリカ各国の状態が良い方向に向き始めたことを確認し、各国に連絡し、国連とその専門機関 I M F に仲介してもらって、アフリカ経済共同体を作ります。経済的な交易について、国の壁を取り除くのです。これは今は説明しませんが、新しいルールのもとで、一人一人が喜びを持って生きてゆけるような仕組みを作ります。E U 共同体のような国々のエゴを許容するようなルールではなくて、利益より平和を指向したルールにします。政治体制は既に出てしまった国単位に民主化を進め、経済だけは共通の繁栄を目指すのです。この経済共同体の流通面での最も大きなポイントの1つは各国がいくつかの得意分野の産物を提示し、それを各国が承認して、それを国のシンボリックなトーテム — 独占的な商品 — とさせることで

す。他国はこのトーテムを侵害しないように常に配慮することを約束させます。トーテムを変えようと思うときは必ず各国の代表で構成される委員会の承認を必要とするようにします。大体以上のような方法で変革を図ります。どう思いますか？)

巫希子が拍手をした。ウグングは目を丸くした。モンジャルは真剣な面持ちで祐子を見詰め、2度頷いた。ウグングが言った。

「*****」(すごい計画ですね。本当に実現できたら、素晴らしいと思います。アフリカ全土を一気に平和な世界に変えてしまおうという計画なんですね。しかし、アフリカには様々な民族が生きていますし、外部からの幾多の黒い欲望の触手が伸びてきています。その上、内部では私利私欲に翻弄された多くの危険きわまりない組織が跋扈しています。奴らは隙あらば、相手の資産を横領しようと手薬煉引いて待ち構えています。それらの侮れない勢力に対しては、どのような手を打つのでしょうか？彼らには愛や慈悲の心は通じません)

祐子はほほえみを浮かべて言った。

「*****」(日本にも昔から暴力団という、一般市民を苦しめる負の存在があります。彼らは人々の弱みにつけ込んで、人々から金を巻き上げて生きています。何処の世界にも負の存在はあります。しかし、負の存在が優位に立っている世界は改革しなくてはなりません。日本の暴力団は警察機構に押さえられていますから、表だって活動することはできません。あくまで世間に認められない存在として、生きることだけが許容されている組織なのです。アフリカの場合は、そのような負の存在が勢力を持ち、酷い場合はその国全体をも牛耳っていることが問題なのです。その原因の大半は、根底に貧困があるからです。精神的にも、物質的にも貧しています。やっとのことで生きている人ばかりなのです。そこからあらゆる方向に脱出を図ろうとする動きが出てきてしまいます。私たちが計画を軌道に乗せようとするとき、それらの組織の妨害に遭うことは自明のことです。しかし、今回考えているのは、それらの組織を飛び越えた方法なのです。給与の支給が滞っている軍などの武力組織の人たちにも、同じように食料を支給するのです。それ以上の支給は

しません。彼らが飢えないようにします。それと、国外からの侵略に対しては、先ずその首謀者の所に警告文書を転送し、それでも執拗に侵略を続けるのでしたら、時限装置付きの爆弾の転送で対応します。そうすれば、あらゆる侵略が不可能になることと思います。いつ、どこで爆弾の転送を受けてしまうか分からないのですから。想像できますか？軍が侵攻しているときは、何処に隠れても、爆弾が送り付けられるのですよ。どんな野心的な組織でも撤退せざるを得ないでしょう)

「*****」(すごく面白いですね。物質転送機があれば、この世界は全く変わってしまいますね。もし、それが悪用されたらと思うと、背筋が冷たくなります)

「*****」(ウグングさん、私の計画に賛同してもらえますか?)

「*****」(国連事務総長や赤十字社の本部長にどのようにコンタクトを図るつもりですか?)

「*****」(手紙、電話、インターネット、メールそれらを駆使してアプローチを図ります。それでもだめなら、先ほど説明した大統領に対する方法と同じような方法を用います。勿論爆弾を送り付けることはしませんが・・・)

ウグングは大声で笑った。そして、一呼吸置いてから言った。

「*****」(ユウコママ、やりましょう。あなたのような美しい顔の持ち主のどこから、このような戦略的な考えが生まれてくるのでしょうか?)

「*****」(ウグングさん、ありがとう。是非成功させましょう。マンパッド・ミサイルは、自陣の防衛用にそのまま配備しておきましょう。アジトを攻撃された場合の対処方法も用意しておく必要がありますからね)

2人の会話が途切れた時を見計らって、亜希子が言った。

「*****」(このアフリカには、既に亡くなってしまった方々の迷える魂がものすごく沢山いらっしゃると思います。その魂もお救いしてあげなくてはならないと思います。お姉様、それはどのようにしたらよろしいとお考えですか?)

「*****」(巫紀、あなたの考えは?)

「*****」(はい、お姉様、わたくしは1000万人もの亡くなった方々について、個別にご指導させて頂くのは物理的に無理のような気がします。どこかに集合してもらって訳にはいかないかと考えています。そして、その方法は・・・やはり、難しいです)

ウグングが首を傾げるようにして言った。

「*****」(一体、何の話なのですか?)

「*****」(過去に亡くなってしまった人たちの魂をどうやって救うかということです。救ってあげないと、いつまでも幽界という地上に非常に近い空間に居て、苦しみや悲しみから抜け出せずにつらい思いをされているのです。その上、本来の人間の生まれ変わりのプロセスに戻れないので、自己の成長も果たせないのです。そのことは、結果として人類全て、大自然全体に影響を与えてしまうのです)

「*****」(つまりは、人間は、死んでも死なないということなんですか?)

「*****」(はい、命は永遠に続きます。自分の命が終わるときはこの世界が消えて無くなる時です。宇宙が消滅するときです。実際にはそのようなことにはなりません。人は何度も生まれ変わって様々な経験を積み、自己を成長させて行くのです。そして、それがすなわち、この宇宙の成長に繋がるのです)

「*****」(もし、そうだとすると、死ぬことを怖れることは無いということになるのではないですか?)

「*****」(本当はそうなんですよ。でも、一般には死というものがあるから、そして、人の人生は、生まれ出たときに過去の生の記憶が全て消え去っているというシステムになっているから、人は死後も魂が継続するという事実を忘れ、今世に集中して生きて成長できるのだと思います。とてもすぐれた仕組みだと思います。ただただ創造神に感謝し全托するのみです)

「*****」(ママユウコ、今は良く理解できませんが、これから共に戦って行くわけですから、いろいろご指導をお願いします)

「*****」(私は、指導などできませんが、知っていることをお話することはできます。これは全て私の最も尊敬している方から教わったことですから・・・・ところで、亜紀、さっきの話だけど、1000万人もの亡くなった人たちを、幽界の想念の渦の中から救い出すためには、あなたの言うように個別の対応だけではなくて、全体に対して働きかける方法を用いる必要があると思うのよ。それは・・・・)

「*****」(そんなことができるのですか、お姉様)

「*****」(ええ、それは空間の浄化しかないと思うのよ。浄化された空間に入ると、自分の身も自然に浄化されるのよ。自分とこの空間とは同じものなのよ。あの人がよく言っているでしょう。だから、地域全体を浄化すると、そこに居る人たちの心も浄化される。心が浄化されると、周囲に展開する世界も変わってくる。それをこの地上で行うと、地上での想念の歪みから生まれた幽界も浄化される。そうすると、幽界そのものも存在できなくなる。幽界は人の意識が作り出している擬似的な空間だから。そこまでは比較的スムーズにできると思うのよ。亜紀、だから、あなたは個々人の指導をしながら、私たちと一緒にこの世界を浄化することに取り組むのが良いわ。一人は1000人、万人そして、何千万人という人達に影響を与えることができるわ)

「*****」(お姉様、わたくし、やってみますわ)

ウグングが祐子の考えをまとめ、連絡網を通じてアフリカ各地の仲間に連絡を取るようになった。連絡文書では物質転送機とOVSのことには触れないことにし、その説明なしでも理解させるようにウグングがモンジャールと相談して文面を作成することになった。連絡文書は3日ほどで末端まで伝わるはずだと言った。祐子と亜希子はその部屋を出た。祐子は亜希子とふたりでアフリカの変革計画について賢に相談することに決めた。祐子は賢に呼び掛けた。

「あなた、私です。祐子です。先ほどはありがとうございました」

賢は祐子から2度にわたるOVSの転送の依頼を受けてから、ずっと祐子の状況を透視していた。祐子の考えているアフリカ変革の内容を知って、身震いを覚えた。「あの最も荒廃している大陸を、理想郷に変える

という考えが、本当に祐子の意識から生まれてきたのだとすると、祐子の意識は既に人類の核にまで届いているのかも知れない」と云う考えが頭に浮かんだ。祐子は地球上の人類を本来の姿に戻すために変革に取り掛かったのだと感じた。そして、祐子に対しては全面的な支援をしようと心に決めた。それと同時に、自分に課せられている使命について、「直ぐに着手する段階に至ったようだ」と察した。「祐子がこの現象界の変革を手掛け、亜希子が霊的な変革を手掛けている。自分は精神的な面の変革を早急に推し進めなくては、ふたりの女性の行為に附いてゆけなくなってしまう」と思った。「諏訪でのプロジェクトの具体的な推進を、できるだけ早く実行に移すことが必要だ」と感じた。ベッドの中でそんなことを考えているときに、祐子から再び連絡があった。賢は直ぐに応答した。

「祐子か、うまくいったのか？」

「はい、あなた、物質転送機とOVSの力はすごいです。その威力を目の当たりにした人は言葉を失い、得体の知れない力に対して畏敬の念を持つようです。前回の私の友達にも、今回できた新しい戦略的なパートナーにも、絶対的な信頼を持ってもらえたようです。現在私たち、私と亜紀はコンゴ民主共和国の東に位置する戦闘地域のジャングルの中に入り込んでいます。そこで、ウグングという改革戦士と長老のモンジャルという方に会うことができました。このふたりがコンゴ、強いてはアフリカ全土を変革させる鍵を握っていることがわかりました。彼らに会えたのも、天の意志による導きだと思っています。私の考え・・・これも、コンゴに入ってから、次々にインスピレーションとして湧いてきたことですが・・・その私の考えを彼らに理解してもらうことができました。もしかすると近いうちに、この国、そしてアフリカ大陸は、平和な世界に変貌を遂げることができるかも知れません。勿論、これから進む道がそれほど容易なものでないことはよく分かります。でも何故か知らないけど、私にはその計画がうまく進むような気がしているのです」

「祐子、透視で君たちの会話や、意識の変化を捉えていたから、君の計画はおおよそ理解できたよ。それにしても、すごい計画だな。国連の事

務総長や赤十字世界本部の責任者を引っ張り出し、参画させる計画には恐れ入ったよ。だけど、各国の大統領がそう簡単に考えを変えとは思えないが、大丈夫なのか？」

「私にもどんな風に進展するか分かりませんが、やるしかないと思っています。僅かでも国民に対する愛を持っていれば、必ずできると確信しています・・・あなた、申し上げにくいことですが・・・」

「うん、分かっているよ。50億円の資金と、マイクロチップの開発と、物質転送機とOVSだよな」

「はい、あなたの力をお借りしなくては、この計画は進めることができません」

「俺はそれを幸いに思っているんだ。こちらでも諏訪のプロジェクトを実行しなくてはならないが、その先行的なトライアルとして重要な投資と見做すことができる。俺も君たちの計画に参画させてもらうよ」

「あなた、そう言って頂ければ、もう何も怖いものはありません。ありがとう。ほんとうにありがとう」

「祐子、身体をこわすなよ。それから、亜紀のことも気になっているんだが、そんな危険な土地で、亜紀は生きて行くことができるのか？」

「私たちは、大丈夫です。それより、あなたの身体のことを心配です。もう、回復したのですか？」

「勿論、肉体的には多少、動きづらいところもあるけど、殆ど元の状態に戻ったよ。ずいぶん心配掛けたな」

「それを伺って安心しました。今、亜紀と替わります」

「あなた、お元気でいらっしゃいますか？お加減は如何ですか？」

「亜紀、いろいろありがとう。ずいぶん心配掛けたな。もう大丈夫だよ。こっちは心配ないよ。それより、君の方が心配だ。アフリカの最も危険な地域の、そのまた奥の別の危険が一杯あるジャングルの中に入り込んでいるんだろう。食べ物や、衣類など大丈夫なのか？必要なものがあつたら、何時でも言えよ。こちらには物質転送機があるんだから、何でも送ってやるよ。食事は大丈夫か？それから、水はどうだ？病気に罹らないように注意しろよ」

「あら、あなたのお言葉にされては、ご心配が過ぎますわ。わたくしはとっても元気なんですもの。由宇お姉様が附いていてくださいますし、わたくしたちを護衛してくださる兵士の皆さんもいらっしゃいますから、全く心配は要りませんわ」

「亜紀、そんなに意地を張らなくても良いんだよ。俺の前では、裸の君で居てくれていいんだ。苦しいときは苦しいと言えよ。その方が楽になるよ」

「いいえ、本当に今はとっても楽しいのです。わたくし、夜はお姉様と寄り添ってテントで休んでいるのですよ。こんな幸せなことはありませんもの」

「亜紀、さっき由宇にも言ったけど、俺も君たちの仲間に加えてもらうことにしたよ。だから、これからは、君たちと行動をともにすることが多くなると思う。これまでは君たちだけで、頑張ってきたけど、これからは俺も、原さんも全面的に協力するから。何時でもコンタクトを取ってほしいんだ」

亜希子の顔色が変わった。焦げ茶色の顔の染料が剥がれ落ちて、白い肌が見えている頬が、ピンク色を帯びてきた。

「あなた、うれしいです。わたくし、何と言ったら良いのかしら。これって、「幸せ」って言うのですね・・・」

賢とふたりの女性とのテレパシー通信は暫く続いた。祐子も亜希子も賢が自分達と行動を共にしてくれる機会が増えることになったので、気持がうきうきしてきた。ふたりはこの計画の全体のスケジュールを立てることにした。先ずバブルチャートで計画の推移を描き、それに必要なインフラや設備を明確にしていった。コンゴについては事前に調査をしてあったので、ウグング達の組織のアジトがどこにあるのかを確認し、物質転送機とOVSを配備する必要があるかどうかを検討した。その結果、当面物質転送機とOVSはコンゴの本部に1台だけ配備し、それをフルに活用して、作戦を立てることにした。どうしても現地の状況把握が難しい場合には、その地区にあるアジトに追加のマシンを配備することにした。祐子は翌週から大統領や各省庁の大臣に対してアプローチを開始

することに決めた。

祐子達はその日の午後、残りの3軒の家を訪問した。3軒には健康な家族が住んでいた。しかし、彼らはどんだの貧困生活を営んでいた。この3家族がこれまでずっと、ここに住んでいる者達の生活を支えてきたのだった。彼らは自分達が毎日の糧を得る為のみ生きていることに、何の不満も持っていなかった。唯必死に生きているのだった。最初の家族は家長の男性、その妻、そして9歳になる息子の3人暮らしだった。家長の男性と息子は狩猟に出掛けて居なかった。妻のソルチアだけが家を守って居た。ソルチアは歌を唄いながら、楽しそうにフフを作っていた。彼女は「ここで生きて行くのは厳しいけれど、ここに来る前の生活よりずっと幸せよ」と言った。

「*****」(ここに来る前は、いくら働いて、努力して何かを手に入れても、全て兵士達に奪われてしまったわ。いつも不意に襲ってくる暴力に怯えながら生きていなければならなかったのよ。でも、ここに来てからは、生きることが喜びになったわ。家族が安心して、生きていける。朝、夫が狩りに出掛け、私は食事の支度をし、家の道具を作る。いつでも自由に歌を唄い、夜はダンスを踊ったりできる)

ほほえみを浮かべてそう言うと、再び歌を口ずさみはじめた。祐子と亜希子はソルチアに過去のことを尋ねることは止めた。

次の家は5人家族だった。奥の板張りの簡易ベッドに年老いた女性が横になっていた。ベッドの脇に2人の女性が坐っていた。この家の家長は隣の家と同様、狩りに出掛けていた。息子が居るが、まだ5歳になったばかりで、隣の子供と外で遊んでいるとのことだった。ベッドの脇に坐っている女性はダングハという17、8歳の女性とコスバニイという35、6歳の女性だ。ベッドの上の老女はソロという名前だった。腹部を患っているようで、食物が喉を通らず、痩せ細っていた。挨拶を交わすと、コスバニイが、祐子と亜希子に微笑み掛けながら言った。

「*****」(母が、あなた方にお話ししたいと言っています)

ソロはほんの少し唇を動かしたただけだったが、コスバニイはそれを読み取って祐子達に伝えたようだ。祐子は直ぐにソロの近くに寄って話し掛

けた。

「*****」(どこか具合が悪いのですか?)

「*****」(母は、「自分はもうじき死ぬから、外の世界から来た人にこの地の大切なことを伝えたい」と言っています)

ソロの僅かな唇の動きを読み取ってコスバニイが言った。祐子は言った。

「*****」(分かりました・・・でもその前に、具合の悪いところを見させてください。わたしは看護師ですから、できることをしてみます)

コスバニイはソロの耳元で、祐子の言葉を伝えた。ソロは頷いて、口をもぐもぐさせた。

「*****」(母は、「お腹の下の方が何時も苦しくて、食事も喉を通らないし、息も苦しい」と言っています)

祐子はソロに寄り添い、身体の上方10センチほどのところに右手を翳して下腹部を撫でるようにソロの身体に沿って動かした。祐子の脳裏にソロの内臓の気の滞りが映った。子宮に大きな塊がある。腎臓、肝臓、膵臓、脾臓いずれも生気を失っている。その上、気管支が炎症を起こしていた。祐子はいつものように、先ず膣中に右掌を宛て、プラナを注入した。気管支の炎症が消えた。暫くの間気の注入を続けた。臓器が活力を取り戻してきた。更に祐子は右手を臍の上、神闕^{つぼ}の脰に当ててプラナの注入を行った。しかし、痼^{しこ}りは簡単には小さくならない。祐子はソロの衣類を裾から引き上げ、腹部を露わにした。モンジャルは後ろを向いた。祐子は臍の下方に指を立てた。みるみる祐子の指がソロの下腹部の中に入って行く。赤い血が流れ出た。それを見ていた2人の女性は悲鳴を上げて気絶してしまった。モンジャルはその声にビクリとしソロを見て驚愕した。祐子がソロの腹部から直径5センチほどの血だらけの黒い塊を取り出した。亜希子が直ぐにガーゼを祐子に渡した。祐子はそれでソロの腹部を軽く拭い、そのガーゼの上に今取り出した塊を載せた。亜希子がもう一枚のガーゼを祐子に渡すと、祐子はそれで手を拭った。祐子が指を挿入したソロの腹部に傷跡は見当たらない。祐子は静かにソロの衣類を元に戻してから、穏やかな口調で話し掛けた。

「*****」(もう、大丈夫ですよ。今晚から食事も摂れるでしょう。口もきけるようになっていきますよ)

ソロは微笑んで言った。

「*****」(どうしたというの? どうなったのかしら? 痛みが無くなったわ。それに話もできる。身体も動かせる。私は死んだのかしら?)

「*****」(いいえ、ソロさん、あなたは若い人たちのために、もっと生きなくてはだめよ)

「*****」(あなたは、一体誰なの? 私はこの1ヶ月ほどの間、ずっとあなたの姿を見ていたわ。目を瞑っても、目を開けていてもいつもあなたが目の前に現れて笑っていたわ。私は、精霊のお迎えだと思っていたの。もうこの命も長くないって。でも、いま、私は死んでいないとあなたは言う。私はどうなったのかしら?)

「*****」(ソロさん、あなたは生きていますよ。大丈夫。私にお話があるのでしょうか)

気絶をしていた2人の女性が意識を取り戻した。モンジャルは口をぼかんと開けて成り行きを見詰めている。亜希子が祐子から受け取ったガーゼに包まれている腫瘍をモンジャルに渡した。モンジャルは気を取り戻すかのように首を2、3度横に振ってから、それをコスバニイに渡して言った。

「*****」(すごいものを見せてもらった。これは、お母さんのお腹の中にあったできものだ。後で、森の土の中に埋めなさい)

コスバニイは小刻みに震えながら頷いた。ダングハは壁の隅に身体を丸めて蹲ってしまった。

「*****」(私は・・・村の呪術師から、恐ろしいことを言われました。そうです。以前住んでいた村です。ここから50キロも離れた所にあるカケンギニという村です。呪術師は言いました。「この国は呪われている。この国を良くしようと立ち上がったものはみな、最初は正義感に燃えているが、権力を握ると程なく悪魔に魅入られ、国民の生き血を吸い始める。その悪魔の化身は国民の生き血を集めて、金に換え、それで宮殿を建てる。その悪魔の化身の口からは腐敗臭を振りまくよだれ

が垂れ、この国の周りにある国々に住む毒バエや毒蜘蛛たちがその腐敗臭に群れ集まって来る。悪魔はその毒バエや毒蜘蛛たちを蹴散らそうと躍起になり、悪魔に血を吸われて瀕死の状態にある国民達を鞭打って、毒バエや毒蜘蛛を追い払おうとする。だが、毒バエも毒蜘蛛も逃げどころか、益々この国の中に入り込んで来る。毒バエは毒蜘蛛と仲が悪く互いに相手を殲滅しようとして躍起になって戦い合いながら、悪魔の化身に向かって攻撃して来たり、取り入ろうとして悪魔に媚びたりする。その様子を見た毒蜂や毒蟻などあらゆる毒を持った周辺国の昆虫たちが、その隙に腐敗臭の漂うよだれを吸い取ろうとして群がって来る。この国は地獄の様相を呈す。国民の多くが命を失い、生きる望みも無くなったとき、2人の女性が現れる。それは遠い、遠い世界からやって来た者達だ。この女性達は香水のようなとっても良い香りを放っている。その香りは悪魔の吸った血のにおいや、口から出したよだれの腐敗臭を消し去ってくれる。臭いがしなくなると、毒虫たちは、次第に元の国に戻って行く。しかし、毒バエと毒蜘蛛はなかなか帰らない。それは毒蜘蛛がこの国の中に大きな巣を作ろうとしているからだ。毒バエはそれを邪魔しようとして、なかなか、この国から手を引こうとしない。毒バエが国を離れている間に、自分の国の内情が悪化し、毒バエはジレンマに陥っている。2人の女性は毒蜘蛛と毒バエに強い芳香の香水を振り掛ける。すると毒蜘蛛はそろりそろりと自分達の国に戻って行く。それを見た毒バエ達もそそくさと自国に引き上げる。やがて悪魔に魅せられていたこの国の元首や取り巻き達は自分の行ってきたことに怖れをなし、この国から逃げ出す。2人の女性は毒虫たちを集め、香水を振り掛けて全ての毒を消し去る。そして、毒虫たちが自分達の国の中に作った巣をばらばらにさせ、この大陸に巨大な、あらゆるものを受け入れる塚を作る。その塚のおかげで、全ての虫たちが仲良く生きてゆけるようになる。この国も以前の美しい、自然に恵まれた、あらゆる動物、植物、虫たちを育む地に蘇る」こういう話をしたのです。そして、呪術師は「おまえはその2人の女性を迎える準備をしなくてはならない。そして、私の話を彼女たちに伝えなくてはならない」と言ったのです。あなた方がこの部屋

に入って来たとき、私はとても気持ちが楽になりました。呪術師の呪いの言葉から解放されたような気がしたのです。今、呪術師から預かった話をしてしまいましたから、もう、私は自由です。あなたに助けて頂いたこの身体で、精一杯生きようと思います)

祐子は面白い話だと思って聞いていた。その2人の女性を自分達に当てはめたのだと思った。

「*****」(ソロさん、呪術師の言葉に惑わされてはいけませんよ。それに捕らわれると、全てがその枠の中で起きてくるようになりますからね。参考程度に聞いておくだけにした方が良いでしょう。でも、面白いお話ありがとうございました)

祐子の優しい言葉を耳にして、ベッドの隅で蹲っていたダングハが祖母の近くに寄り、その手を取った。

「*****」(おばあちゃん、本当に良くなったのね。私、うれしいわ)

「*****」(ダングハ、心配掛けてごめんね。お腹の塊が消えてしまって、体中が軽くなったのよ。まだまだ生きられそうだよ)

コスバニイもソロに寄り添った。

「*****」(お母さん、もう何ともないの？良かった。これからは「もうじき精霊が迎えに来る」なんて言うてはだめよ。お母さんには教えてほしいことが一杯あるのだから)

「*****」(コスバニイ、私は呪術師に言われた言葉が心に引っかかっていて、身体がだんだん動かなくなってしまったのね。ここにいらっしやるおふたりが呪文を解いてくださったのね。不思議なこともあるものね)

祐子が言った。

「*****」(ソロさんの話してくれたお話しは、聞きようによっては今のこの国の状態そのもののように聞こえるわね。それは、呪術師の言葉がこの国を定義して、固定化が起きてきたようにさえ見えるけど、一旦多くの人その言葉に捕らわれてしまったことで、今の現実が定義されたんだと思うわ。毒虫たちの話は、ただのお話として聞いた方が良

いのよ。それを真剣に受け止めると、その通りの状況が顕現してくるのよ。もう大丈夫よ。たとえ、私たちがその2人の天女だとしても、私たちは香水を使ったりしないから、その話の通りにはならないはずよ) ソロが言った。

「****」(言葉にはそんな力があるのですね)

祐子が微笑みながら応えた。

「****」(私もある方に教えて頂いただけなので、詳しいことは分からないのだけれど、キリスト教の聖書にもあるでしょ。「はじめに言葉ありき、言葉は神と共にありき、言葉は神であった」って。この意味が分かるかしら。「言葉」と謂うのはあらゆるものを作り出す原始の振動のもとになる理念のことなのよ。まだこの世界に何も無い、この世界の始まりのときに、理念が先行したということよ。その理念で世界が出来てきたのよ。「言葉は神と共にありき」ということ、さらには「言葉は神であった」というところが大切なよ。ここで言う神というのは、創造主という意味よ。神という存在は「この世界を作っている理念そのものだ」と言っているのよ。言葉が声に出されて音に替わると、創造が始まるのよ。あらゆるものが振動していて、その振動であらゆるものが出来てくるのよ。言葉は振動だから本当はこの世界には何も無くて、全てが言葉で出来ているって考えられるのよ。だからこの世界のものは有限で、しかも実体は無いのよ。ただ、ものの原型の理念だけがそれぞれの人の内側にあるのよ。呪術師はそれを知っているから、言葉を使って現実を作り出そうとしたのね。18世紀に、ヨーロッパの諸国によって、このアフリカ大陸の自由な形に歪みが与えられてしまったでしょう。そこからあらゆる毒がアフリカ諸国の中に蔓延して、そこに住む人たちを苦しめはじめたのね。呪術師は人々を苦しめている各国の首脳を虫になぞらえ、ヨーロッパからもたらされた歪みを毒と表現したんだと思うわ。そして、それらの毒が各国首脳の身体に巡り、彼らが毒虫となってこの国を襲って来るって言ったのよ。それを沢山の人たちが信じ、怖れを抱いたために、それが現実化したのね。つまり、呪術師の言葉をみんなが正当なものだとして扱ったから、それが現実的な表現に合致してしまっ

たのよ。いま、ソロさんはその言葉を捨てた。だから、お母さんもお孫さんもう呪術師の言葉に捕らわれてはいけないわ。あなた方がその言葉を捨てれば、現実次第にまた元の流動性を持ってくるわ。その流動性の中で、今度は新しい理想的な世界を作って行けば良いのよ。その時には新しい言葉を使うのよ。もう、古い言葉は使ってはいけないわ) ダングハがおどおどした口調で言った。

「*****」(とっても難しいお話ですが、それでは私はどうしたら良いのでしょうか。どうすれば少しでもこの国のお役に立てるのでしょうか?)

「*****」(それはとっても大切なことよ。まず、あなたがあなた自身でいることよ。あなたの生きたいと思うように生きること。勿論愛と、慈悲の心を持って、歓喜に満ちて生きるのよ。それだけで良いのよ。他には何もする必要は無いのよ)

「*****」(そんなことをおっしゃられても、それだけでこの戦乱によって乱れ、混沌とした国が良くなるとはとても思えませんけど・・・)

「*****」(そう思うてしまうのでしょうか?みんなそうなのよ。だから、今の世界はそうなっているのよ。言葉である理念を天国的なものにしないで、天国は現れてこないのよ。コスバニイさん、ダングハさん、心を純粹にして、人々を愛し、慈しみ、そして喜びに満たされて、理想的なこの国の姿を思い描いて生きているのよ。必ずそうなるから)

「*****」(私はそんなことは絵空事のように思っていますが、でも、最善を尽くして、そういう自分であるように努めます)

その時外で地響きと共に「ドドドドー」という大きな音がした。モンジャルが直ぐに外に飛び出して行った。祐子と亜希子も後を追った。ジャングルの中で、何かが倒れるような地響きが続いている。兵士達が一斉に銃を手に周辺に散った。ピグミー達が森から飛び出して来た。モンジャルがピグミー達と話をしている。沢の方からマリーやソニアが駆けつけて来た。マリーが慌てた様子で言った。

「*****」(あのすごい音は、一体、何が起こったのでしょうか?)

ピグミー達と話し終えたモンジャールがみんなの集まっている所にやって来て言った。

「*****」(奴らです。どうやら川下からジャングルに入ってきたようです。あなた方を追っているのかもしれませんが。ピグミー達が「もう少しすると奴らがやって来る」と言っています)

マリーが言った。

「*****」(あれは、地雷が爆発したときの音のように思うわ)

祐子が訊いた。

「*****」(こんなジャングルの中に地雷を仕掛けるようなことがあるのかしら?)

「*****」(この村が戦闘集団ルワンダ解放民主軍(ϕDLR)の襲撃を受けたとき、彼らは村人が逃げ出さないようにすることと、政府軍と反政府組織コンゴ民主連合(ρCD)をこの地に近づけないようにするために、このジャングルへのもう一つの進入経路に地雷を仕掛けたようです)

モンジャールが言った。

「*****」(ということは、どこかの軍隊がこのジャングルに入り込もうとしているということなのかしら?)

祐子の言葉に、モンジャールは頷いた。

「*****」(多分そうでしょう。あなた方を追ってきたのかも知れません。一刻を争います。家を畳んで、全員洞窟内に避難させましょう)モンジャールが各家を廻り、全員に連絡をした。人々がぞろぞろと家から出て来た。モンジャールの合図で全員葦葺きの屋根を取り払い、地面から木の枝の柱を抜き去ってそれを沢に抜ける道の上に積み重ねた。ベッドも全て分解され、敷物はきちんと畳まれて女性達が食器類と一緒に抱えるようにして持った。モンジャールは全員をウグングの洞窟の入り口に導き、そこから一人ずつ洞窟の中に入るように言った。全員がこの秘密の洞窟のことは既に知らされていたようで、皆スムーズに行動した。昨日まで病の床に伏せていた者達に、もう病の影は見えなかった。村人全員が中に入ってしまうと、次にマリーが先ず祐子に中に入ってほしいと言

ったが、祐子はマリーとソニアを先に中に入れた。亜希子は祐子の側に残りがったが、祐子はそれを許さなかった。結局、外に残ったのは兵士達と、祐子とモンジャルの6人で、銃を手に兵士達は藪の中の岩陰に身を潜めた。モンジャルと祐子も磐の後ろに身を潜めた。ピグミー達はいつの間にか姿を消してしまっていた。森の中に消えてしまった様だ。地響きのような音がしなくなって暫くすると、沢に近い森の中からざわざわという草を掻き分ける音がして、いきなり一人の身体の高い男が銃を手にして現れた。その後から2人、3人と次々に男達が現れた。軍の制服は着ていない。普段着のまま、銃で武装している男達だった。大きな身体の高い男が空き地の端にある枯れ草や、木々の枝を積み上げた場所を見つけ、それを指さして小声で何か仲間に行った。男達は銃を構えたまま、身体を屈めるようにして枯れ草に近付いて行った。男達が空き地の中央付近に来ると、大男が一瞬身体をのけぞるようにしてから、その場にどっと倒れた。直ぐに2人目の男が倒れ、そして3人目の男も前のめりに倒れた。村の男達が仕掛けた罠がうまく働いている様だ。残された2人の男が怖れをなして、辺りをきょろきょろ見回し、出てきた藪の方に戻ろうとしたが、もう一人の男がその場に倒れた。次の瞬間、藪の中から14、5人の男達が姿を現した。男達は仲間が倒れているのを見ると、慌てて藪の中に引き返した。逃げ出した男は苦しうにして藪の入口まで駆け戻ったが、藪に逃げ込む前に、入り口の一步手前でつんのめるように倒れ込んだ。藪の中から激しく銃が乱射された。祐子、モンジャルと兵士達は、じつと身動きせずに様子を覗っていたが、銃撃がある度に頭を下げて、岩陰に身を潜めた。

一瞬辺りが静まり返った。祐子は瞑目した。苦しみもがいている男達の声が頭の中を駆け巡った。祐子の姿が倒れている男達の側に、初めはぼんやり、そして次第にはっきりと現れてきた。祐子は最初に倒れた男の胸に刺さっている小さな毒矢を抜いた。その時藪の中から何本かの毒矢が飛んで来た。しかし、どういうわけか祐子には一本も当たらない。藪の中から祐子を狙って、激しい銃の連射が続いた。しかし弾丸は全く祐子に当たらない。まるで祐子の身体を素通りしているようだった。兵士

達は慌てて、祐子を援護するため藪の中を狙って銃を連射した。激しい銃撃戦が始まった。祐子は銃撃戦の音が聞こえないかのように、倒れている男達に近寄り、毒矢を抜いていった。祐子をめがけて飛んでくる弾丸は、全て祐子の目の前で消えた。祐子が立ち上がって言った。

「*****」(止めなさい。なぜ、殺し合うのですか？あなた方のこの人生は、もう、2度と経験できない人生なのですよ。もっと大切にしてください。以前は同じアフリカに住む仲間だったのでしょ。どうして憎み合うのですか？お互い助け合って生きていた昔の自分達に戻りなさい。お母さんのお腹から出てきた、無垢な自分を思い出してください。両親や周りの人たちに育てられて、大きくなった自分の姿を見詰めてみなさい。こんなに恵まれた大自然があるのに、これ以上に一体何をそんなに欲しがるのですか？そんなに死に急いで、殺し合わなくても、この体はいずれ死んで行くのですよ。この人生を、生きる喜びを精一杯味わいなさい。もうすぐわたくしたちがこのアフリカを天国に変えてみせます。天国に銃は似合いません。直ぐに銃を捨てるのです。そんなものは、すぐに、このアフリカの地では何の役にも立たなくなるのです。そんなものを持っていると、自分自身を暗い闇の世界に引きずり込んでしまいます)

祐子の声は、まるで拡声器を使ってでもいるかのように、大きな音で辺り一帯に響き渡った。その声はモンジャルの胸を振るわせた。言葉の意味は理解できなかったが、兵士達の心にも染み込んできた。村に進入して来た男達はその声に怖れを抱いた。しかし、ここまで来た以上、もう後には引けないと考えているのか、怖れを抱きながらも、その場を引こうとはしなかった。銃撃の止んでいる間に、祐子は倒れている男達の身体の中を内視した。血液が毒によって犯され、消化管の粘膜が腐食し始めている、酵素の作用が阻害され、活性化ができない。肺の機能が低下し、息を吸うこともできなくなっていた。男達は痙攣を起こして、身体が麻痺状態になっている。祐子はキャッサバの毒に当たった時の解毒用にいつも持ち歩いている亜硝酸アミルの液の入った小瓶の蓋を開け、それを右手で握りしめて、両手を広げながら、空中に振り撒いた。祐子は

液体が霧になり男達の身体に浸透して行く状況を想起した。一瞬祐子の周りの空間が紫色の霧に包まれた。それは不思議な光景だった。僅かな解毒剤が、霧となって周囲一体に広がり、痙攣を起こして、死にかけている男達を覆い、それが男達の身体の中に取り込まれて行く様子は、常識では考えられないものだった。男達の身体が、機能しなくなっている肺を蘇らせて、一気にその煙霧を吸い込んでいった。男達の体内に亜硝酸アミルが取り込まれ、ヘモグロビンとの結合が始まった。ヘモグロビンとの化合物が出来、それが体中にあるシアンと結合しはじめた。男達がむっくりと立ち上がってきた。まだふらふらしているが、銃をその場に置いたまま、よろめきながら林の方に向かって歩き始めた。それは見ている者達全員にまるでゾンビが蘇ったかのような印象を与え、震撼させた。敵軍の兵士達も怖れが恐怖に替わった。祐子の姿は男達の目には、死人をも蘇らせる妖婦のように映った。モンジャルの目に涙が光った。祐子はよろよろと退却して行く男達の背に向かって優しく言った。

「*****」（この世界の創造主と地母神から頂いた命を大切にしてください。あなた方の身体の中に入った毒素は、身体中のあちこちを壊してしまいました。かなりの毒が解毒されましたが、完全ではありません。休息を十分に取って、身体を元に戻してください。無理をしてはいけませんよ。大切な身体なのだから）

雲間から太陽が姿を現し、光芒が空き地に降り注いだ。祐子の放った煙霧が光を受けてまるでダイヤモンドダストのように輝き、見詰めている者達を驚かせた。天空に3本の虹が架かり、空き地の周辺の木々は嬉々として風に揺れ、鳥たちが先ほどまでの銃声などまるで無かったかのように唄い、舞った。祐子の周囲は天国の様相を呈してきた。藪の中からざわざわと音がしてきた。敵軍が撤退して行くのが分かった。

藪の中の岩陰に身を潜めていた兵士達とモンジャルが草陰から姿を現した。空き地の端、敵の現れて来た藪の前にじっと立っている祐子の側にモンジャルが駆け寄った。

「*****」（お怪我はありませんでしたか？）

「*****」（大丈夫です。彼らは去りました。もう、ここには攻め

て来ないでしょう)

「*****」(すごいものを見せて頂きました。ユウコさんは死んだものをも生き返らせることができるのですね)

「*****」(いいえ、彼らはまだ死んでなかったんですよ。助かる道があったんです。彼らの運命なのでしょう)

「*****」(あの猛毒の矢を受けて生き返ったものはこれまで一人もありません。あの矢を受けたら、普通1、2分で死んでしまいます)

「*****」(きっと、時間の経過がとても遅かったのでしょうね。あの人達、まだ致命的な状態には至っていないようでしたから)

「*****」(時間の経つのが遅い・・・・不思議なこともあるものですね。それより、もっと不思議なのは、敵の鉄砲の弾も、味方の毒矢も全くあなたに当たらなかったことです。あなたには超自然的な力を感じます)

「*****」(私は、自分自身であるだけですわ。殆どの人たちは自分自身を生きていません。だから、自分の思うことが、自分に起きないのだと思います。私には自己が亡くなっています。だから自分自身が現れるのだと思います。意識したとおりのことがその場に現れます。私には鉄砲や毒矢は存在していないのですから)

モンジャルは返す言葉が無かった。ジミーとメドリスナが祐子の足下に跪き、頭をうなだれた。ジミーが言った。

「*****」(ママ、申し訳ありませんでした。ママが狙撃される前に、相手を撃破するのがわたしたちの任務であるにもかかわらず、ママをお守りできませんでした。ママが銃撃を受けてしまわれました。万が一のことがあったら、私たちは生きていられませんでした。私たちは遅れをとりました)

「*****」(ジミー、メドリスナ、私は狙撃を受けたりしなかったのよ。だから、そんな風に謝らなくても良いのよ。それより、よく相手の出足を止めてくれたと感謝しているわ。あなた方も、そして村の人たちも)

ジミーが言った。

「*****」(実際敵がバタバタ倒れるのを目の当たりにして、あの毒矢の恐ろしさに、背筋が寒くなりました。ママが居なかったら、あいつらは全員死んでいたはずです。本当はあんな奴らは死んでしまった方が良いんですが……)

「*****」(ジミー、メドリスナ、あなた方に言うのは酷かも知れないけど、敵を敵と思ってはいけないわ。みんな兄弟だと思わなくてはね。勿論、戦闘の最中にそんなこと思ったら、ひとたまりもなくやられてしまうかも知れないけれどね)

秘密の洞窟の入り口が開いて、中から亜希子やマリー達が出て来た。亜希子は祐子に駆け寄った。

「*****」(お姉様、ご無事でしたのね。うれしいです。みんなとっても心配していました。激しい銃撃戦の音が洞窟の中まで響いていました。とっても恐ろしかったです。それより、お姉様や、皆さんのことが心配で、わたくし、どうして良いのか分かりませんでしたわ)

「*****」(亜紀、あの人達、もう襲って来ることはないと思うわ。でも、私たちがいつまでもここに居たら、この村の人たちに迷惑を掛けるわね。明日にでもここを出て、もっと北に進んだらどうかと思っているのよ。位置情報端末がこの物理的な位置を認識したから、もうこの人達とは、いつでも連絡を取り合えるわ)

それを聞いていたマリーが言った。

「*****」(ママ、北部はここより、もっと危険です。ウガンダ、ルワンダ、ブルンジの3国が入り乱れて政府軍と戦っている戦場です。クツの残党や反政府軍もあちこちに潜伏しています。その上、一番危険なのは、ママやアキさんが女性だということです。この国の男達は公然と女をレイプするし、国もそれ罰しようとしませんでしょう)

「*****」(マリー、それにソニアだって女性でしょう。私は、この国でも、男性と女性間に危険性の差は無いと思っているのよ。だから、男4人、女4人でキガリを出立したのよ。レイプは男が女を求めているから起きる犯罪でしょう。男は男を殺すけど、女は女を殺さないわ。最も嫌悪すべきことは男がレイプした女を殺すことよ。ここは現在、男

が女より、愚かになっている世界よ。訳もなく相手を殺し、求めた相手まで殺してしまうのだから。日本だったら、死刑か無期懲役になる犯罪よ。それが日常茶飯事なんて、こんな異常な状態は、極限状態に居なくちゃ起きないわ。殺戮の行われている現場に行って、それを認識して、一気にその煉獄を天国に変えなくてはならないと思うのよ……180度の転換。それに、アフリカ全体も)

「*****」(ママ、また、思いによって変えようとおっしゃるのですか?煉獄を天国に……)

「*****」(そうよ。だけど、もっと具体性を帯びた方法を用いるのよ。後で、マリーにも話すわ。多分、この計画はもう動き始めているから)

祐子の言うとおりに、アフリカ転換計画は既に動き始めていた。

男達全員が葦葺きの家を元通りに直し始めた。いつの間にかピグミー達がダイカーを捕らえて戻って来た。女達は賑やかに話したり、歌を唄いながら料理をはじめた。その晩はみんな特に嬉しそうだった。夕方の食事は昨晚と同じように、全員が円陣を組んで摂ることになった。元病人の人たちも全員外に出て来た。ウグングの姿もあった。食事の前にモンジャルが話をした。

「*****」(みんな、今日もピグミーの皆さんがダイカーを捕らえて来てくださったので、こうしてご馳走を頂ける。先ず、私たちを守ってくださった森の精霊に感謝を捧げよう)

全員がモンジャルの合図で黙礼をした。

「*****」(さて、今日は大変な一日でもあった。どこかの軍隊が我々の村を襲った。皆が常々非常事態に備えて準備してくれていたことが見事に功を奏した。一つは秘密の避難洞窟。もう一つは敵を撃退する罠だ。しかしそれだけでは、一時的には持ちこたえられても、長い間にはいずれ見つけ出されて、殲滅されるに違いない。それを救ってくださったのが、ママユウコだ。それは、これまでの我々の考え方を変えるような教訓を含んでいるから、敢えてここでみんなに話しておきたい。敵は大勢の兵の先行隊として5人をこの広場に送り込んだ。しかし、5人

は我々のあの「死の毒矢」に射止められて、全員瀕死の状態になった。普通はそこから、敵と味方の銃撃戦になる。いや、確かに銃撃戦は起こった。しかし、その銃弾飛び交う中で、ママユウコが一人、毒矢に当たり身体が麻痺してもう間もなく死のうという5人の男達の体の中に、空中から解毒剤を注入して救ったのだ。敵の、それも我々を殺そうとして襲ってきた男達だ。ママユウコは男達に相手を憎むなどおっしゃった。武器を捨てて平和になれとおっしゃった。そして、毒が身体を蝕んでしまっ、やっとの事で戻って行く敵に、身体を労るように優しい言葉を掛けられた。そのあと、天から光が注ぎ、3本の虹が架かり、辺りは天国のような雰囲気になった。それを目の当たりにした敵軍の者達は、もうそれ以上攻撃を仕掛けてくることはなかった。敵は静かに撤退して行った。もう彼らは来ないだろう。我々は相手と戦うとき、常に相手を殲滅しようとする。そうしないと、自分がやられると思うからだ。しかし、ママユウコは違った。銃弾がママの身体には1発も当たらなかったのだ。今まで、外れた試しのない毒矢も全部外れた。ママユウコは愛と慈悲そのものなのだ。そのような存在には、戦いの道具は通用しない。だから、ママにとっては武器などは何も無かったのだ。敵も味方も無い。ここは平和なアフリカだとママは言う。その通りのことが私の目の前に展開された。私の心もママユウコの慈悲の心に打ち震えた。君たちも覚えておくがいい。自分の奥底にある通りの世界が自分の目前に展開することを。それでは話が長くなったが、ママユウコから一言頂いてから食事にしよう)

祐子はにっこり笑って立ち上がった。

「*****」(皆さん、お腹がすいているでしょう。さあ、何事もなかったという喜びに満ちて食事を戴きましょう。ピグミーの皆さんに、村の皆さんに、兵士の皆さんに、そして私たちを守ってくださる大いなる存在に感謝して、素晴らしい食事を戴きましょう)

祐子の言葉で皆食事をはじめた。祐子は教訓めいた言葉を一言も口にしなかった。必要なかった。ソニアが祐子の近くに来了。ビールを半ダース兵士に持って来てもらっていると言った。祐子は微笑んで、男達に振

る舞うように言った。ソニアは嬉しそうにマリーの近くに行ってビールの栓を抜きはじめた。男達の目の色が変わった。

元通り張られたテントの中で、身繕いを整えるために用意してきたコスメ・セットを取り出そうとして、祐子はバックパックを開いた。どうも中がごわごわする。1 通の封書が出てきた。それは位置情報端末の側にあった。アイリーンが物質転送機を使って祐子に送ってきた手紙だった。祐子は直ぐに封を切った。巫希子が興味深そうに見詰めている。

「*****」

(ママユウコへ

大変な国での仕事は順調ですか？こちらは全て順調です。スバハも元気に育っています。時々ママユウコを思い出したように、私のことを「ママ」と言って、顔をじっと見詰めたりします。フルマの方も順調に推移していて、個人出資者も着実に増加しています。サスカブ首長が時々お見えになり、スバハの様子を訊いて帰ります。

今日、手紙を送ったのは、フルマに国連の事務次官から連絡が入ったからです。最近国連にアフリカ救済同盟という組織が出来、現在共和国制を敷いている国の政情不安やソマリアやコンゴ、エチオピアなど多くの難民が発生している国の抜本的救済について検討を開始したとのことです。しかし、現政府の存在が、国連の活動を阻む形になっているので、政府と直接関係せずに民間レベルで国を立て直す検討をしているようです。そんな折り、ルワンダの現状がクローズアップされ、この国の安定性が増していることを検証して行く段階で、フルマが話題に上がったようです。第1回の会合で国連の代表団がフルマを視察することになり、このたび打診があったわけです。現在責任者のママユウコがコンゴの現状を視察中 — サスカブ首長の判断でそう答えたのですが — なので、ママユウコと連絡を取って、後日回答すると応えておきました。国連にはどのように回答したら良いのでしょうか？お返事をお待ちしています。お返事は1日後に、こちらで受物装置の周囲1センチ以内のものを引き寄せますので、それまでに用意して置いてください。なお、視察には国連の事務総長も参加する予定とのことです。

ママユウコ、どうかお体を大切になさってください。そして、亜紀さんやソニアなど、ほかの人たちにもよろしくお伝えください。

アイリーンより)

祐子は嬉々とした。まさに望んでいたことが向こうからやって来たのだ。亜希子に手紙を見せた。亜希子は驚いたようだった。

「お姉様、すごいですね」

マリーがそれを聞いて、祐子に尋ねた。

「ママ、どうしたのですか？」

「マリー、国連の視察団がフルマを視察したいんだって。アイリーンから連絡があったのよ」

「ママ、アイリーン、キガリです。どうやってここのジャングルいるママに連絡したのですか？携帯電話、ここ通じないです・・・」

「物質転送機よ。また機会をみてマリーにはゆっくり説明するわ。想いを実現させる話と一緒にね」

「私、心配。今聴きたいです。ママ、何を考えているのかを」

「マリー、今はまずいのよ。日本語もあまり使わないようにしないとね。チャンスを見て説明するわ」

マリーはやっと納得した。ソニアも起き上がって、日本語で話し合っている3人を心配そうに見詰めている。祐子が言った。

「*****」(ソニア、心配しなくても大丈夫よ。フルマの話をしていたのよ。フルマは順調で、みんな元気なそうよ。アイリーンがあなたのことを心配していたわ)

ソニアはどうやってアイリーンからの連絡を受けたのか特に疑問に感じていないようだった。それより、むしろ祐子が自分の理解できない言葉を使った理由を説明してもらえて安心したようだった。

祐子は直ぐに返信を書いた。はじめに、アイリーンに対して、乳母としての苦勞にねぎらいの言葉と、サスカブはじめフルマの運営を行っている者達への感謝の言葉を述べてから、国連の視察団の訪問は受理すること。キガリでは祐子の代わりにサスカブに説明してもらうこと。そして、最も重要なこととして、事務総長に「コンゴのゴマに立ち寄って、これ

からのアフリカについて、そこで会談を持ちたい」と伝えてほしいと書いた。最後に祐子はアイリーンにこれからもスバハの面倒を看てもらうことへの感謝とスバハへの愛の想いを伝えてほしいと付け加えることも忘れなかった。

祐子は手紙をアイリーンの送ってきた封筒に入れそれを位置情報端末に付けてバッグパックに入れた。少しすると亜希子がテントの脇に人の気配を感じた。

「お姉様、外に誰か居るようです」

「誰かしら？」

「*****」(ユウコさん、お話してもいいですか?)

女性の囁くような声が出た。祐子はテントの裾を持ち上げて外を覗き見た。プリミテだった。キルリエがプリミテの背後に隠れるようにしている。祐子は起き上がった。ソニアの姿が見えない。祐子はテントから外に出た。ジミーが歩哨に立っていた。その横に人影が見える。ソニアだ。ソニアは祐子に気付かないようだった。祐子はプリミテに近付いて囁いた。

「*****」(どうしたの?)

「*****」(はい、ユウコさんにお話ししたくて来ました)

「*****」(よく来てくれたわ。そこじゃ暗いから、明るいところに行きましようか?)

2人は頷いた。祐子は2人を連れて月明かりに照らされて、浮き出ているように見えるゾウガメに似た形をした磐の所に行き、2人に磐の上に腰掛けるように促した。2人が腰を下ろすと、自分もその横に腰掛けて言った。

「*****」(何のお話かしら?)

キルリエが祐子とプリミテの間に挟まれ、小さくなって坐っている。

プリミテが応えた。

「*****」(キルリエがママに聴いて頂きたいことがあるそうです。それに、私もおねがいしたいことがあります)

「*****」(キルリエ、あなたの名前なのね。何でもお話ししてね)

キルリエは美しい目を輝かせて、ぼつりぼつりと話し始めた。

「*****」(私の・・・病気は・・・治ったの?)

「*****」(治ったと思うわ。もう心配しなくても大丈夫)

「*****」(どうして、私を、治してしまったの?私は、死ぬのを待っていたのに・・・)

「*****」(でも、病気はつらいでしょう?)

「*****」(体が痛いし、息苦しくてつらいわ、とつてもつらい。でも、死ぬと思ったから我慢できたの。私は、もう生きていたくないもの)

「*****」(ずいぶんつらい思いをしてきたのね)

祐子はそっとキルリエの手を取った。

「*****」(生まれたときにはもう、両親がいなかったの。父の弟夫婦に育てられたの。叔父さん達もとつても貧乏だったけど、私が歩けるようになるまで育ててくれたの。でも私がよちよち歩きを始めた頃にふたりとも亡くなってしまった。それから、近所の小母さんが私を育ててくれたの。7歳になったとき、町の“女の館”に売られたわ。暫くは食べ物が食べられたので嬉しかった。おじさん達がかわいがってくれたから、甘えられて楽しかった。だけど、かわいがってくれたのはほんの暫くの間だった。だんだん変なことをされるようになったの。私は夜が厭でたまらなかった。まだ10歳そこそこで毎晩見たことのない男の人の相手をさせられたの。私は自分が誰で、どこで生まれたのかも、両親が誰なのかも分からなかったし、この町やその向こうがどうなっているのかも知らなかったから、生きると云うのはこういうことなのだと思っていたの。我慢して生きていたわ。ある日、狭い部屋の窓から、両親に付き添われて、楽しげに歩いている私と同じくらいの年の女の子を観て、私はとても悲しくなってしまった。それから、昼間は窓から外を見て、通り過ぎる私の友達を眺めていた。一人で友達に話し掛けて、お話ししていたの。友達と謂つても私が勝手に決めただけだけど。友達が大きな荷物を手に持って通って行くことがあったわ。それがお買い物の荷物だということを後で知つたの。一緒に“女の館”で働いていたたった一人

の優しかったおねえさんコムレガから聞いたわ。お買い物って、何だか分からないけど、とっても楽しいことだって。私はお買い物を一度してみたかったわ。コムレガは昔、お買い物をしたことがあるんだって言っていたわ。その時はお母さんが生きていて、コムレガにスカートを買ってくれたんだって。コムレガもそれがたった一度のお買い物だったんだって。うれしくて、うれしくて、毎日毎日新しいスカートを抱いて寝たんだって。コムレガがいろいろ教えてくれたのよ。お話しする言葉も、この町のことも、この国のことも。私たちは毎日男のお客さんの相手をしていて、つらいのを我慢しているけど、これは本当は大好きな人とすることなんだって、そうするととっても良い気持ちで、嬉しいんだって。でもコムレガにもそんな大好きな人はいなかったみたいだけど。私は昼間は部屋の掃除をしたり、食事の支度をしたりして、夜は男のお客さんの相手をして生きていたの。ある日、コムレガが居なくなったの。支配人さんからコムレガが病気になったので、どこかの病院に行ったって聞いたわ。後で知ったのだけど、コムレガはどこか別の所に売られて行ったんだって。病気なのに、病院にも行けなかったみたいなの。コムレガは“女の館”を出てから、50日くらいして死んだわ。私が病気になったのはコムレガが死んでから少ししてからなのよ。私は支配人のおじさんに連れられて小さな小屋のような家に移ったの。森の近くの町から離れた一軒家だった。そこに住むことになったの。もう夜のお仕事は無くなったわ。だから、私はとても幸せな気持ちになったの。その上、支配人のおじさんは私にお金をくれたわ。「30日くらいはキャッサバを買える筈だ」って言っていた。そこには私と同じ病気のガザリーが住んでいたわ。ガザリーはほとんど寝たきりだった。私より3つ下だった。私は病気でも普段は元気だったから、寝ているガザリーの世話をして生きていたの。フフも作れるようになったわ。だけど、だんだんお金が少なくなっていくって、私たちはどうしようかと困ってしまった。ガザリーは私を「おねえさん」と呼んだわ。私はくすぐったいような気がしたわ。毎日ガザリーと一緒にフフを食べるのが楽しみだった。ガザリーは私の手を取って「天国でも一緒に生きよう」って言っていたわ。毎日フフが

いっぱい食べられて、お友達も沢山居て。1年に一度はお買い物もできて・・・そんなお話をしていたの。とっても楽しかったわ。でもガザリーの身体はだんだん動かなくなってきた、とうとう死んでしまった。死ぬとき、私の手を取って、「お姉さん、わたし天国で待っている」って言って微笑んだの。「私も、もうじき逝くから待っていてね」って応えたわ。ガザリーは私の手を握り締めて、そのまま死んだの。私は、一生懸命頑張って近くの森の中に穴を掘って、ガザリーを埋めたわ。それから私の身体の調子が急に悪くなったの。お金も無くなって、買ってあったキャッサバとタロイモの葉が無くなったら、後は水を飲んで生きられるところまで生きるだけ・・・毎日毎日苦しくて、苦しくて、やっと生きていたわ。早く死にたかった。そんな私を見つけてくれたのがモンジヤル爺さんとプリミテ姉さんだったの。ここに連れてきてくれたわ。でも私はだんだん動けなくなってきた・・・ねえ、ユウコママっていう名前なの？ どうして私を助けたの？ 私は生きていても仕方ないし、またあの苦しみが待っているのに・・・)

祐子は無言でキルリエの頭を自分の胸に引き寄せ、抱き締めた。キルリエはしばらくの間祐子の為すままになっていたが、やがて、祐子の背に両手を廻して、抱き付いてきた。

「*****」(キルリエ、生きなさい。ただ、生き抜くのよ。私が一緒に居てあげるから。ガザリーの分まで生きなさい)

「*****」(私、ガザリーと約束してしまったわ。「直ぐに天国に逝くって」だから、早く死ななくちゃならないの。ガザリーが待っているから)

キルリエは祐子の胸の中で呟くように言った。

「*****」(キルリエ、直ぐに天国に逝っても、ガザリーに持って行くおみやげが無いでしょう。ガザリーががっかりするわよ。楽しいお話を沢山持って行かなくては、天国がつまらないわよ。いいわね、私が楽しいお話がいっぱいできるようにしてあげるから、私と一緒に生きなさい。あなたを妹にしてあげる。いいえ、お母さんの代わりになってあげるわ)

祐子は自分に抱き附いているキルリエの腕に力を感じた。キルリエの目に一滴の涙が光った。

「*****」(お姉さんと呼んでも良いですか?)

「*****」(良いわよ。私の名前は祐子よ。よろしくね)

「*****」(私はみなしごで、何も知らなくて、何も出来なくて、病気だったし、身体も汚れているし・・・それでも、私を妹にしてくれるのですか?)

「*****」(あなたは、かけがえのない妹よ。あなたはとても綺麗よ。どこも汚いところなんて無いわ。これからは私が一緒に居てあげるから、困ったことがあったら何でも相談しなさいね。さあ、今夜はもう遅いから、お部屋に帰って眠りなさい。あっ、そうそう、プリミテも私に話があるんじゃないかかしら?)

プリミテは真剣な面持ちで祐子を見詰めて言った。

「*****」(ユウコさん、この村を出て行くんでしょ。私と一緒に連れて行ってくれませんか?)

「*****」(私たちはもうじきここを発つけど、どうしたの?何かしたいことがあるのかしら?)

「*****」(私も、あなたのように人々を救うために生きたいのです。是非私を連れて行ってください。キルリエは連れて行くのでしょうか?)

「*****」(あなたが居なくなったら、モンジャル老翁が悲しむんじゃないの?)

「*****」(それは大丈夫です。私は一度結婚して家から出た娘ですから。ユウコさんと一緒なら、父は許してくれると思います)

「*****」(そう、じゃあそうしましょう。でもその前に私は大切なことをしなくてはならないのよ。一旦ここを出て、直ぐに戦闘地域になっているゴマに入り込むことになるのよ。その大切なことをし終えたら、必ず一度ここに帰って来るから、それまでに身体をしっかりと元に戻して、体力を付けておいてね。私たちの活動は結構体力を使うから、元氣じゃなくちゃだめなのよ。必ず、あなたたちふたりを迎えに来るから)

「*****」(はい、分かりました。私は、あなたの側で生きたいのです。もう決めてしまいました)

祐子は頷いた。祐子はもう一度キルリエを抱き締めた。ふたりは嬉しそうにねぐらに戻って行った。テントに戻ると亜希子が囁くように言った。

「お姉様、どうされたのですか？」

「プリミテとキルリエが来たのよ。キルリエを妹にしたわ。3人姉妹になるわよ」

「えっ？キルリエって、あの無口な子ですわね。何歳かしら？」

「16歳だと思うわ。亜紀、寝よう」

「はい」

翌朝祐子はマリーと殆ど同時に目を覚ました。亜希子は祐子に身を寄せた姿勢で眠っている。ソニアも蹲るようにして眠っている。祐子は亜希子を起こさないようにしながら、静かに起き出した。外に出るとマリーが祐子に言った。

「ママ、昨日の夜、誰か来たですね」

「ええ、プリミテとキルリエよ。お話をしただけ。キルリエを妹にすることにしたわ」

「どうしてですか？」

「あの娘には何か運命的な繋がりを感じるのよ。彼女、今まではまだ生きていなかったわ。これから生まれるのよ」

「意味、よく、分かりません」

「今に、分かるわよ」

ふたりは顔を洗いに沢に出かけた。徹夜の護衛をしてくれたメドリスナがふたりを見て挨拶した。祐子はメドリスナを労った。沢で身を清めていると亜希子とソニアがやって来た。めいめい挨拶を交わすと、ソニアが祐子に聞いた。

「*****」(ママ、昨日磐の上で誰とお話ししていたのですか？)

「*****」(あら、ソニア、どうして知っているの？)

「*****」(いえ、あ、あの・・・)

祐子はあの時の護衛をしていたジミーの側にソニアが居たことを思い出

した。慌てて、どぎまぎしているソニアに向かって、さも何も気付いていないかのように言った。

「*****」(プリミテとキルリエがお話をしに来たのよ)

「*****」(そっ、そうでしたか)

そう言うとソニアは急いで沢に下りて行った。村の女性達のがやがやと話しながらやって来た。皆交互に挨拶を交わした。プリミテとキルリエが祐子の近くに来た。ふたりの黒い肌は朝日を受けて輝いているようだった。特にキルリエは生き生きしていた。目鼻立ちが整い、多少ウェーブが掛かっているとは云え、黒人には珍しいストレートヘアだ。祐子はプリミテに微笑みかけ、キルリエを抱き締めた。ふたりは楽しそうに小走りで沢に下りて行った。祐子は女達に向かって言った。

「*****」(皆さん、良く聞いてください。今日からキルリエは私の妹になりました。よろしくね)

皆驚いたようだったが、それぞれキルリエに近づき祝福した。女性達が沢の水で口をすすぎ、顔を洗っていると、上流の方から女達の歌声が聞こえてきた。高い声が鳥の声と解け合ってとても心地よく耳に響く。

「*****」(ピグミーの女性達の歌声です。彼女たちは沢で良く歌を唄うんです。一人が唄い始めると、自然にみんなが唄い始めて、合唱みたいになるんです。とても心に響く歌で、私大好きです)

プリミテが言った。キルリエにとっては初めて耳にする歌声のようで、しばらく珍しそうに耳を澄ましていたが、そのうち、歌に合わせて鼻歌を唄い始めた。その響きに、女達はそれぞれ自分のトーンで鼻歌を唄いながら身を清めた。

「*****」(ユウコお姉さん、歌は人と人を繋ぐのですね)

身を清めてテントに戻る途中、背後からキルリエが小声で祐子に言った。

「*****」(そうね。人と人ばかりじゃなくて、鳥たちとも通じ合うようね。キルリエ、これが私の双子の妹、亜紀)

祐子は側を歩いている亜希子を指さして言った。3人は立ち止まった。亜希子はキルリエを抱き締めた。キルリエもしっかり亜希子の背に手を回し、抱き付いた。

「*****」(ソニアのフフは美味しいでしょう。ソニアは料理が上手なのよ)

祐子が言った。

「*****」(はい、こんな美味しい食事は食べたことはありません。ここは天国のようです。いいえ、きっと天国です。ユウコお姉様と亜紀お姉様のふたりのお姉様を授けて頂いて、私はガザリーに申し訳なく思います)

「*****」(ガザリーも天国に居るわ。天国は心が作る場所なのよ)

「*****」(神様の心が作るのですか?)

「*****」(いいえ、あなたの心よ。あなたの心が喜びに満ちていれば、あなたの周りの世界は天国になるのよ。あなたの心が悲しみと苦しみに満ちていると、周りは地獄のようになるの)

「*****」(ユウコお姉さん、喜んでいる人と、悲しんでいる人が一緒に居ると、そこはどうなるのですか?)

「*****」(あら、キルリエ、なかなか鋭いわね。ちょっと難しいけど、あなたの目の前にある世界はあなたの心の中の世界なのよ。そして、他の人の心にはあなたが見ているのとは違った世界がそこにあるの。だから形は同じでも、違う世界なのよ。そう、良い例があるわ。ここに1つのフフがあるとすんでしょ。そのフフはあなたが食べるととっても美味しいけど、他の人が食べたら美味しくないといい言いかも知れないわね。それと同じようなことなのよ)

「*****」(ユウコお姉さん、分かりました。私の心が感じた世界が私の世界なのですね)

ユウコはキルリエの鋭い感性を嬉しく思った。学校にも行けず、まともな教育も与えられていないのに、キルリエの感性は普通に生きている人より遙かに研ぎ澄まされていると感じた。それはむしろ、極限の状態を生きてきた為に自然に身に付いた感性か、あるいは持って生まれた特性なのではないかとも思われた。祐子はキルリエを抱き寄せて、額にキスをした。キルリエはきょとんとしたが、直ぐに満面の笑みを浮かべた。

昨日と同じように全員が一堂に会しての朝食になった。モンジャルの挨拶の後、祐子が立ち上がって言った。

「*****」(皆さん、おはようございます。今朝も朝食を頂けることに感謝致しましょう。その前に、お伝えしたいことがあります。私たちは明日の朝、一旦ここを立ちます。やらなければならないことが出来たからです。でもそれをやり遂げたら、また戻って来たいと思います。出発する前に、皆さんにとっても楽しいお知らせがあります。食事が終わったら、私はあなた方の家を廻りますから、あなたの一番ほしい品物と、特別の場所を私に教えてほしいのです。あなたのほしい物が、もし私たちの手元に無ければ、今夜の内に、それをあなたの特別の場所に送り届けてあげます。但し、今晚一晩の間、その特別の場所には近付かないでくださいね。それではお食事を始めましょう)

村の人々はざわついた。祐子が何を言ったのか分からないようだった。ボニグ老人に促されてラミリーが立ち上がった。

「*****」(わたし、「ラミリーにお洋服をください」って神様にお願ひしたの。そしたらね、朝起きたらとってもかわいいお洋服とスカートとお靴がお部屋の隅に置いてあったのよ。お姉さんがくれたんだっておじいさんが言ったわ。お姉さんは神様かな?)

村の者達はラミリーの話に目を丸くした。朝食の場はプレゼントの話で盛り上がっていた。食事が済むと、祐子はメンバー全員を集めて明日の朝出立するので直ぐに準備するように伝えた。先ず車を乗り捨てたジャングルの入り口まで戻ることにした。今回の移動の目的はゴマで国連事務総長に会見することで、ゴマまでの道は非常に危険なので、その覚悟をするように伝えた。マリーが何か言いたそうにしていたので、祐子の方から言った。

「*****」(マリー、事情が変わったのよ。ゴマで国連事務総長に会うことになりそうなの)

マリーは納得したようだった。全員が準備に掛かった。祐子はバックパックから位置情報端末を取り出そうとした。アイリーン宛ての手紙が消えていた。祐子と亜希子のふたりは村人との約束通り、物質転送機の位

置情報端末を手にして家々を廻り、プレゼントの品物と、転送位置情報の記録を行っていった。中にはアフリカでしか手に入らない物を望む者もいたが、それはうまく説明して別の物に変えさせた。村人の望んでいるものはどれも値段の安い、日本なら直ぐに手に入る品物だった。女性はほとんど鍋、釜、衣類などを所望したが、男性は斧やのこぎり、ラジオ、デジカメ、自転車など様々な物を欲しがった。デジカメを欲しがった者は2人いたので、持参してきたデジカメとソーラー充電器を後で届け、ついでに使い方も説明した。残りの品物は全て賢に頼んで直接家々に送ってもらうことにした。全ての家を廻ってしまうと、祐子は賢にテレパシーを送った。賢は直ぐに了解した。その後で祐子は亜希子、モンジャールと一緒にウグングを訪れた。ゴマで国連事務総長に会うことになったことを告げると、ウグングは真剣な面持ちで頷いた。事務総長との会談の結果をウグングに連絡することに決めた。物質転送機を用い、ウグングとの間で1日に1回手紙を用いた情報交換を図ることにした。その結果を受けて、ウグング達が次の行動に出ることになった。ウグングは大統領の現在位置や官邸の空き地の特定と、送りつける小型爆弾の調達や、文面の作成を急ぐと祐子に言った。祐子はウグングと、物質転送機で荷物のやりとりをする位置を取り決めた。準備が整ったら、大統領やその他重要人物に送りつける物をその場所に用意し、祐子に連絡するように伝えた。当面転送は指定された時間に祐子が行うことに決めた。第2ステップの為に、暫くしたらOVSとDVDビデオレコーダーを決められた位置に転送する約束をした。電源の問題はウグング自身で何とかすることになった。

翌朝の食事は歓喜の中で行われた。村人はそれぞれプレゼントを持ち寄っていてそれを互いに見せ合いながら食事を楽しんだ。

食事が済むと、プリミテとキルリエが祐子の元にやって来た。ふたりの目には涙が浮かんでいた。祐子と亜希子は2人と抱擁を交わした。一行は村人に暫しの別れを告げた後出発した。ピグミー達が先導してくれた。村人達は一行が沢を越え、ジャングルの中に姿が消えてしまうまで見送っていた。一度通ったジャングルの筈だったが、やはりあちこち難所だ

らけだった。4人の女性達は藪の葉で手足を傷だらけにして進んだ。兵士達はもちろんのこと、ピグミー達も女性達を気遣ってくれた。全員がジャングルの入り口に戻ったのは2時過ぎだった。ピグミー以外は皆一刻も早くジャングルから出たかったので、昼食も摂らずに一気に出口まで進んだ。草地に出ると全員荷物を降ろした。みな汗でびっしょりになって疲れ切っていた。兵士達は隠しておいた品物が無事かどうか確認するために周囲の岩陰を探し廻った。全て無事に残っていた。女性達は自分の持ち物を確認した。祐子もバックパックを開いてみた。位置情報端末の横に通の書簡が届いていた。アイリーンからだ。フルマが順調なこと、スバハが元気に育っていることが前置きされていて、国連事務総長との会談に附いての回答が記載されていた。事務次官から会談を2日後の午前10時にゴマの空港の近くにあるホテル エグゼクティブ・パレスで行いたいと言ってきたと書いてあった。祐子は「ホテルまで無事辿り着くわよ」と自分自身に念を押した。祐子は直ぐに了解した旨の返信を書いて位置情報端末の側面に差し込んだ。それから、賢にテレパシーを送った。自動車を元の位置に戻してもらったためだった。祐子のテレパシーの合図で、賢が転送を実行することになった。

全員がそれぞれ荷物の確認を済ますと、祐子が全員に声を掛け、一行はそこに寄り集まってソニアが用意してあったフフのサンドイッチを食べた。ピグミー達は少し離れたところで食事を摂った。沢で汲んで来た水ももう僅かしか残っていなかったが、食事には十分だった。食事が済むと祐子は全員をジャングルの入り口付近まで退避させて、広場中央に向かって立ち、両手を真上に上げてそれを徐々に横に広げて「えいっ」と言った。それと同時に、「あなた、送ってください」とテレパシーを送った。地上30センチほどの空間に突如2台の自動車の車体が顕現しドスンと音を立てて車体が地面に落ちた。車の積荷はここに来たときのままだ。皆目を剥いて見詰めていたが、祐子に何か言う者は一人も居なかった。アルフォンとジミーが車のエンジンを掛けてみた。直ぐに掛かった。祐子はマリーにエグゼクティブ・パレスは空港の近くのホテルだと告げた。マリーはそのホテルを知っていた。場所の見当も付くと言った。マ

リーが全員に目的地への行き方を説明した。マリー以外誰も位置が分からない。マリーが道案内をすることになった。祐子はピグミーたちにはここに残ってもらうことにしてそれを告げた。リンガラ語が通じるわけではなかったが、祐子がピグミー達の目を見ながら説明すると、3人は了解してくれた。マリーがピグミー達に手数料を支払った。ピグミー達は手数料のことはよくは分からないようだったが、祐子が紙幣の用途を説明すると、3人は納得したようだった。マリーがピグミー達にキガリから持参した鎌とナイフをそれぞれ1本ずつ渡した。ピグミー達は紙幣より、鎌やナイフの方が気に入ったようで、嬉しそうだった。ピグミー達が森に消えると、全員が急いで車に乗り込んだ。アルフォンの車が先行してスタートし、ジミーが追尾した。少し行くと亜希子が言った。

「あの木の上に留まっていたのよ、お姉様。敵が逃げて行くのがとても面白かったですわ」

「亜紀、ごめんなさいね。あなたに危険なことばかり頼んで。私がテレポーションできれば良いんだけど……」

「お姉様、わたくし、お姉様に言われてテレポーションするときが一番楽しいですわ。お姉様がわたくしを頼りにしてくださるのがとっても嬉しいの。だって、テレポーションと死後の世界に行くこと以外では、全部お姉様にかなわないんですもの」

「そう言ってくれるとホッとするわ。でも、できるだけ貴女を危険な目に遭わせたくないのよ。亜紀が頼りなのよ」

「そんなことおっしゃらないでください」

程なく往路で襲撃を受けた地域に差し掛かった。メドリスナが膝の上の小銃を外に向けて構えた。マリーからトランシーバーの連絡があった。

「*****」(ママ、皆さん、往きに攻撃を受けた場所に差し掛かります。注意してください)

ジミーが言った。

「*****」(ママ、アキさん、スピードを上げます。暫くの間、身を伏せていてください)

アルフォンの車を追うようにジミーがエンジンを噴かして危険な場所を

一気に突破した。しかし何も起こらなかった。皆胸を撫で下ろした。漸くジミーの許可が出て祐子と亜希子が頭を上げると、再びマリーから連絡があった。

「*****」(ママ、無事通過、良かったです。これからサクの町通ります。気を付けてください)

暫く行くと、銃を手にした男達が道路に立ちはだかってアルフォンの運転する車を止めた。メドリスナも車を停めた。全員緊張した。男達は銃口を下に向けていたので、祐子は警戒心の中にも多少の安堵感を覚えていた。亜希子が言った。

「*****」(お姉様、前方から激しい激情の波が押し寄せて来るのが分かります。ここは危険だと感じます)

「*****」(確かに、すごく大きな感情の嵐が吹き付けてくるような感じがするわ。ここは一本道だから、後退するか、藪の中に身を隠してやり過ごすしかないわね。でも、あの男達は一体何者なのかしら?)
ジミーが言った。

「*****」(ママ、あの男達は我々が往きにチェックを受けてマリーがビールを渡してやり過ごした男達と同じ奴らだと思います。ここに移動したのだと思います。味をしめたのかも知れません)

「*****」(それじゃ、政府軍ということかしら?それにしては、普段着というのも可笑しいわね)

アルフォンとやりとりをしていた兵士の男が銃口をアルフォンに向けた。メドリスナも直ぐに銃を膝の上に用意した。祐子はアルフォンと男のやりとりに意識を集中して天耳を開いた。

「*****」(おまえ達はジャングルの調査をすると言っていた筈じゃないのか?それなのに、もう戻って来るとはどういうことだ?)

「*****」(ここでの最初の調査は行った。ゴリラの習性の観察や蟻塚の実態調査などだ。このジャングルはそれほど深くないから、調査は短期間でできた。あとは一旦ゴマに行って資料の整理をし、この国にしかないオカピなどの動物を調査するために、次の目的地イトゥリに行く準備をするつもりだ)

マリーの受け応えに、男はもう一人の男の方を向いて何か言った。2人でなにやら相談を始めた。祐子は意識を男達に向けてみた。

「*****」(こいつらはどうも怪しい。森の調査が2、3日で済む筈はない。何かを隠している)

「*****」(武器を持っているかも知れない。車全体を調べた方が良いかも知れないぞ)

祐子の耳に自動車の走る音が聞こえてきた。前方の彼方に土埃が立ち上っているのが見えた。亜希子が金切り声で言った。

「*****」(お姉様、逃げないとまずいわ)

道路を封鎖していた男達が急に道路の両側の藪の中に散った。2台の車が残された。アルフォンが車を旋回させた。ジミーも直ぐに旋回した。2台の車は元来た道に戻り始めると、エンジンを思い切り噴かした。祐子は向かってくる車が5台以上であることを察知した。ジミーが進行方向から7、80人ほどの銃を手にした男達が向かって来ることに気付いた。ジミーは草の丈の低い藪に向けて無理矢理ハンドルを切った。車は藪の中を大きく揺れながら進んだ。アルフォンも付き従ってきた。ジミーの車は石に乗り上げて動かなくなった。

「*****」(ママ、アキさん、頭を低くしててください)

そう言うと、ジミーは車のエンジンを切り、銃を手にして外に飛び出した。メドリスナも同時に飛び出し、アルフォンとベムも直ぐに後に続いた。4人の兵士達は草むらに伏せて銃を構えた。後方から進軍してきた6台の装甲車がさっき検問を受けた辺りに差し掛かると、藪の中から激しい銃撃を受け、車はそこを通過して停車し、応戦を始めた。装甲車から兵士が次々に降り、藪の中に散った。一瞬静まり返ったが、直ぐに激しい銃撃戦が始まり、やがて手榴弾が飛び交うようになって、戦いは激しさを増してきた。祐子には何処の軍と何処の軍が戦っているのか皆目見当が付かなかった。先ほど前方から進軍してきた7、80人あまりの兵はどこに消えたのか姿が見えなくなった。そのうち装甲車が次々に手榴弾を受けて炎上し始めた。先頭の車がガソリンに引火して爆発した。2台目、3台目まで爆発炎上してしまった。4台目以降の車は方向を変

えて元来た道を逃走して行った。激しい銃撃戦が暫くの間続き、やがて収まった。どうやらどちらかの軍が相手を制圧したようだった。両手を挙げた男達が道路上を連行されて行く。先ほど逃走した車が戻って来た。どうやら、装甲車で襲ってきた軍が勝ったようだった。3台の装甲車が戻って来た。戻って来た車からは兵士達が続々と降りて来た。およそ50人は居る。8人ほどの男が両手を黒い綱のようなもので縛り上げられ、戻って来た先頭の車に乗せられている。兵士達は銃を構えて祐子達の載っている車に向かってゆっくり前進してきた。ジミー達は身を伏せたまま発砲せずにじっとしていた。下手に戦意を見せたらひとたまりもない。相手は銃だけでなく手榴弾も持っている。

「*****」(亜紀、ここで待っているのよ。良いわね、絶対外に出ちゃだめよ)

強い口調でそう言うと祐子は車から降りた。亜希子は祐子に附いて行こうとしてドアレバーに手を掛けた。しかし、外に出た祐子の鋭い視線を受け、その手を引っ込めた。祐子は4人の兵士達が身を伏せている所に歩いて行った。ジミーが言った。

「*****」(ママ、危険です。身を伏せてください)

「*****」(ママ、車に戻ってください、奴ら、猛り狂っています)メドリスナも言った。

「*****」(こちらから仕掛けてはだめ。私は武器を持っていない。いきなり発砲することはない筈。私のことより、自分の身を守りなさい)祐子はそう言い置くとそのまま、進軍してくる兵士達に向かって歩き出した。4人の兵士が直ぐに立ち上がり、祐子の前に出て祐子を守るような体制を取った。

「*****」(ジミー、メドリスナどきなさい。アルフォン、ベム、私は彼らに話をするので。彼らも人間だから、私の話が分かる筈です)進軍してきた兵士達が一齐に左右に広がりあつという間に祐子と4人の兵士を取り囲んだ。4人の兵士達は銃を構えた姿勢のまま、祐子を囲むように立ち、首を左右に激しく回し腰を低くして、祐子を護衛する体制を取った。先頭を歩いて来た指揮官に見える男が言った。

「*****」(おまえ達は何者だ？そいつは女じゃないか)

「*****」(私たちはジャングルの生物の調査をする研究班だ)

祐子が応じた。

「*****」(銃を捨てろ、さもなければ、おまえたちは蜂の巣だ)
指揮官とおぼしき男がそう言うと、周囲を囲んでいた男達が一斉に銃口を5人に向けた。祐子が言った。

「*****」(みんな、銃を捨てなさい)

祐子は4人の兵士に言った。4人は銃を放り出した。

「*****」(おい、こいつらが何か隠し持っていないか調べろ)
リーダーとおぼしき男の両脇に居た、6人の屈強そうなカラシニコフを手にした男達が前に出て、祐子達に近付いた。男達は投げ出された銃を脚で蹴って遠のけると、4人の兵士の身体にふれ、ボディチェックをした。その中の2人の男が祐子に近付くと、いきなり祐子の腕をつかもうとした。

「*****」(私の話を聞いてください)

「*****」(何か言いたいことでもあるのか?)

指揮官とおぼしき男がそう言うと、祐子の手をつかもうとした男達は一瞬手を引いた

「*****」(私たちは、ジャングルの生物の調査だけでなく、この国を天国にするためにやって来たのです。アフリカの人たちは今まで苦しみの中に居ました。もう、その苦しみを撥ね除け、幸福な世界を実現する時が来たのです。アフリカは大自然を持っています。アフリカの人たちが幸せにならなくては、この地球は決して幸せな星にはなれないのです)

「*****」(わっはっはっは・・・そんな戯言は、耳にたこができるほど聞いた。そんなことを言う奴らばかりが、この辺りを徘徊している。奴らの狙いはダイヤモンドや、レアメタルだ。今まで西洋の奴らのやったことを見ても、アメリカ人のやったことを見ても、俺たちに一体誰を信用しろと言うのだ。俺たちの身は俺たちで守るしかない。おまえらなんかは何ができると言うんだ・・・おい、こいつらを引っ捕らえ

ろ)

男達が4人の兵士の腕を後ろにねじり上げ、縛り上げた。2人の兵士が両脇から祐子の両手をつかんで引き立てようとした。その時、周囲を取り囲んでいた兵士の一人が大声を上げた。

「*****」(人が空を飛んでいる)

兵士達が空を見上げ、口々に叫んだ。

「*****」(森の精霊だ、俺たちのことを戒めているんだ)

亜希子だった。車を停めた側にある木の天辺から道の脇にある高い木に向かって天空を飛行するように移動していた。亜希子は手を大きく広げて羽ばたき、まるで鳥が空を飛んでいる姿のように見えた。兵士達は怖れおののいた。しかし、指揮官が言った。

「*****」(馬鹿どもめが、怖れるな。あんなものはまやかした。魔術だ。俺が撃ち落としてやる)

祐子はどきりとした。両腕をふりほどこうともがきながら叫んだ。

「*****」(止めて、止めなさい。やめてー)

天空が急に暗くなり、空一面、黒い雲で覆われた。一瞬のことだった。

「あきー、消えなさい、消えて、早く消えてえー」

指揮官は銃口を亜希子に向け狙いを定め、引き金を引いた。「だだだだー」カラシニコフが火を噴いた。亜希子は銃弾を受け、真っ逆さまに地上に落ちた。

「あきー、亜紀ちゃん、わあーん」

祐子の悲鳴が轟くと、いきなり大雨が降り始めた。周囲を囲んでいた敵軍の兵士達は怖れおののき、一目散に車にめがけて突進した。激しい風が吹き荒れ、その地を押し流すほどに雨脚が強くなった。雷鳴が轟いている。後ろ手を取られていたジミー達4人は自分を取り押さえている男達のひるんだ隙に、綱をふりほどき、銃を奪い取った。男達は必死に車に向かって退散した。アルフォンとベムは逃げゆく男達を後方から空砲で脅した。ジミーとメドリスナは祐子の両手を押さえている兵士に突撃した。

「あきー、亜紀ちゃん」

男達の手を振りふりほどもき祐子は亜紀の落ちた場所に駆け付けた。亜希子は胸部と腹部を打ち抜かれ、身体を地面に打ち付けた衝撃で、肋骨を骨折していて、虫の息だった。

「亜紀、亜紀、亜紀、しっかりして、亜紀」

「お、お姉様・・・わたくし、しあわせ・・・で・・・し・・・た」

亜希子は抱き起こす祐子の顔を見詰めてにっこり微笑むと息を引き取った。

「あきー、えーん、えーん、えーん、えーん」

祐子の泣き声が辺り一面に轟き渡った。稲妻が轟き、暴風雨が吹き荒れ、辺りは暗闇のようになった。祐子は必死になって瞑目し、亜希子の負傷した箇所を修復しようとした。しかしなかなか意識が集中できない。やっと亜希子の体内を透視できたとき、既に亜希子の肉体は活動を完全に停止してしまっていた。祐子は亜希子を抱き締めて泣いた。

「あきー、あきー、えーん、えーん、えーん・・・」

突如道路の反対側の草むらから先ほど見えなくなっていた7、80人の軍人達が現れた。兵士達は逃げ惑う兵士めがけて銃撃を浴びせた。逃げていた兵士達は降りしきる雨の中、泥沼に身を伏せてたり、車を盾に応戦した。再び激しい戦闘が始まった。

祐子は瞑目し、賢にテレパシーを送った。

「あなた、助けてください。亜紀が、亜希子が死んでしまいました。あなた、助けに来てください」

賢は祐子のテレパシーを受け取ると、直ぐに祐子の元にテレポーテーションした。ジミーとメドリスナが驚き、いきなり銃を賢に向けた。

「*****」(ジミー、メドリスナこの方は味方よ)

賢は意識が安定すると、直ぐに亜希子の元に駆け寄って肩を抱き上げた。

「あなた、亜紀が、亜紀が、死んでしまいました。亜紀の命を救ってあげて、えーん、えーん、えーん」

賢は亜希子を抱き起こし、口元に頬を近づけて息を確認した。亜希子の顔は穏やかで、小麦色に染められた肌が一部剥がれてまだらになっている。その気品漂う美しさは少しも褪せていない。しかし、もう息はな

く、心臓の鼓動も聞こえない。賢は霊視してみた。生命の銀線も切れていた。賢は直ぐに瞑目して、亜希子の意識を追って深い瞑想状態になった。まだ残っている暖かい亜希子の手の感触を感じながら、賢は意識を亜希子の魂に集中した。賢の姿が祐子の前から次第に消えていった。亜希子が幽界に留まっている筈はないとは思ったが、賢は先ずは幽界に入ってみた。やはり亜希子の意識はそこにはなかった。賢はエーテル界全体に意識を拡張してみた。しかし、亜希子の魂は既にエーテル界を通り抜けてしまったようだ。心の透明な人間の魂は死後、一気に霊界の高い次元にまで到達すると謂うことを賢は知っていた。賢は亜希子の意識を追い続けた。何時もなら直ぐに捕らえられる筈の亜希子の意識は、エーテル界のどこにも感知することはできなかった。現世から霊界に遷りゆく亜希子の死後のプロセスはもう完了してしまっているようだった。賢は更に意識の次元を高め、アストラル界に入った。光り輝く世界が現前した。意識を亜希子に向けて集中させると、辺り一面、花に覆われた世界になった。遠方の花の中にひと組の男女が姿を現した。2人はみるみるうちに賢の前まで来た。その姿態はまるで霧で出来てでもいるかのようで、身体に淡い霞がかかった白い服を纏っている。2人とも整った優しい顔立ちをしていて、周囲を暖かく感じさせる穏やかな雰囲気を漂わせている。それが祐子と亜希子の両親であることが賢には直感的に分かった。男性が言った。

「亜紀をお探しですか？」

「亜紀さんのお父さんとお母さんですね。亜紀さんは先ほど銃弾を受けて亡くなりました。亜紀さんはこちらには来なかったですか。少し時間が経っていると思いますが」

父は亜希子から娘が死に至った顛末を聞いていた。亜希子は祐子や仲間達を敵の手から救おうとして、注意を引こうとしたのだった。あわよくば、自分の飛行を怖れて敵が退散してくれればと望んでいたのだった。

「つい今し方まで亜紀はここに居て、私たちとお話をしていました。あの子にはずいぶんつらい思いをさせてしまいましたが、美しい心を持った娘に育っていました。私たちより若くして霊界に戻って来てしまいま

したので、それが少し残念ですが、亜紀は「今回の人生はとても幸せだった、愛する人と巡り会えたし、愛する姉 — あの子にとって、由宇は双子の姉妹ではなくて、本当の姉なのです — そのたった一人の姉と一緒に生きることができて、とても幸せだった」と言っていました。私たちはあの子達を育てられずにこちらに来てしまいましたので、自分達が死んだばかりの頃は、気も狂わんばかりの状態でした。特に妻は酷かったのです」

母親が口を開いた。話し始めた姿は背丈こそ少し小さめだが、祐子にそっくりの雰囲気を持っている。

「あのとき、私たちは何が何だか分かりませんでした。由宇と亜紀がどこかに消えてしまったと感じ、自分達が死んだことも分からず、狂ったようにあちこち探し回りました。それが幽界という所だったことを後で知りました。やっと自分達の状態を認識でき、諦めがついたとき、この美しい場所に来ることができました。私たち夫婦はそれ以来ずっとここに住んでいます。家はあの山の向こうにあります。亜紀は3日間そこで過ごしました。私たちに甘えてくれました。由宇のこと、そして、賢さん、あなたのこともいろいろ聞きました。あなたに愛されている自分ととても幸せだと言いました。それから由宇とのことも話してくれました。由宇がとても頼りがいのある、亜紀には真似のできない優しさを持った女性になっていて、今では沢山の人たちを救って生きていることも話してくれました。それを聞いて私たちはとても幸せでした」

父親が後を続けた。

「でも、3日すると、3人の純白な衣服を身につけた男の人たちが現れて、「亜紀はここで生きることはできない、“凝集象域”に移ることになっている」と言って亜紀を連れて行ってしまいました。その“象域”というのはどうやら“次元”に似た意味のようです。でもあの方達は“次元”という言葉は使いませんでした。“次元”は物理的な表現で、意識の世界は含まれませんが、“象域”には精神的な部分が含まれているようです。“高い次元”と謂うのは私たちがその言葉を、わかりやすい言葉に置き換えたのです。“象域”には意識レベルに応じてさまざまな

段階があって、“多重象域”とか“複合象域”とか謂う言葉を使っていました。その方達は我々が用いるような高い低いと言う表現は使っていませんでした。それは認識に基づくもので、常に私たちの謂う“最高の次元”に存在しているとのことでした。亜紀はその“多重象域”より、もっとずっと複雑な領域に移るのだと言っていました。純粋な意識でないと、その領域にはとても入れないとのことです。個の意識が残っていると、その輻輳する領域で、自己の認識に混乱が生じ、発狂してしまうとのことでした。その“象域”にははっきり分かる段階として13の階層があり、極致は原点で、全ての存在がそこから生まれる元だと言っていました。そこからの話はよく分からなかったのですが、その極致の原点にはこの私たちの住んでいる世界や、生前の現象界も全て含まれていて、それがそのまま映し出されて、この霊界や現象界が出来ているのだと言っていました。そこは地上界で“無”と表現する“有の極致”だそうです。亜紀はその一步手前まで行くことになっているとのことでした。私たちにはそれが一体何なのか皆目見当も付きませんが、本当は亜紀はその“有の極致”に至ることの出来る貴重な魂なのだけれど、一旦そこに至ると、もうこの世界の時間で何千億年後に戻って来られるのか、あるいは明日にでも戻って来るのか、皆目見当も附かなくなるとのことでした。亜紀はその極致に至る前にもう一度現象界まで戻ることになっているので、1つ前の“凝集象域”に留まる筈だとも言っていました。その3人の方達も、“凝集象域”がどんなところなのか知らないようで「物理的に達観するとブラックホールのような所で、意識的に透視すると無限大に拡大した状態のように見える」と言っていました。でも、彼らも聞いた話だと付け加えていました。転生のシステムの中に亜紀の今生での現象界に於ける転生を一時停止するしくみを組み込んであるので、亜紀の現象界での肉体は、死んで生命としての魂は抜けても、生きていたときの状態を維持し続けるだろうと言っていました」

賢は両親に礼を述べると、意識を更に深い領域にまで移した。辺りの景色は一瞬にしてかき消え、まぶしいほどの光り輝く世界になった。賢はその世界を俯瞰してみた。沢山の美しく輝く光球が空中に浮いているよ

うなイメージが現前した。その一つ一つがある個体の魂であることが分かった。それらの魂からは、一瞬で感じ取れる慈悲の心が溢れ出ている。賢はその中に亜希子の意識を探した。しかしそこにも亜希子の意識は無かった。ひときわ大きく輝く光球が賢の意識を捉えた。その光球はゆっくり賢に近付いてきた。賢の直ぐ近くまで来ると、光球はムクウの姿に変化した。

「賢、もう肉体は大丈夫なのか？」

「あっ、ムクウさん、その節は僕の命を助けて頂いてありがとうございました。今はもう、殆ど怪我をする前の状態に戻っています。ムクウさん、ご存じと思いますが、亜希子が亡くなってしまったのです。僕は亜希子の魂を追ってここまで来ました。亜希子はここには来なかったのでしょうか？」

「いや、ここで暫くわしと話をしてから、もっと高次の段階にまで上がって行ったよ。高次とは言っても、時空間はここと同じなんだが、認識する力が高まると“象域”が変化する。つまり次第に高い物理次元の認識できる、より高い意識レベルの領域に入っていくことになる。亜希子にはそういう虚実態に関する知識はあまり無いが、殆ど思考を使わず意識で生きてきたので、純粹で深い洞察力があり、より複雑な“象域”を認識できて、その象域に存在することができるのだよ。亜希子はこの霊界については、殆どのことを把握できる。それはわしにもできないことなのだ。だから、わしの力を持ってしては亜希子を現象界に引き留めることはできなかった。亜希子の転生の計画には、長く現象界に留まる計画は組まれていないようだ。亜希子は意識するしないに拘わらず、自然に、本来の自分の意識が安住できる領域に戻っている筈だ。それと、亜希子は自分では認識していないが、この霊界全体に影響を与えるほどの力を備えている。だから今後は霊界から人間の意識を変革するために働いた方が本来の亜希子の力量にかなっていると思う。賢、おまえの意識も亜希子と同じレベルの要素を持っているから、もう少し深い“象域”にまで意識を拡張してみなさい。きっと亜希子は見つかるだろう」

賢は礼を言うと、更に意識の集中を行った。やがてその時空は様々な

事象が複雑に折り重なって存在する領域になった。賢はそれが時空的には4次元以上の領域であることが分かった。自分の意識を働かせると、認識が定まらず、意識に混乱が生じた。過去、現在、未来の空間が渦となって賢の前に展開した。賢は自己を消し去った。そうすることでやっと領域全体を認識できる状態になった。一瞬にしてあらゆる物が認識できた。その中に複数の時空にまたがって存在するいくつかの卵形をした意識の塊が見えた。良く注意してみると、それは生まれ変わりの元になる存在で、そこからは特定の間人などの要素が生み出され、人間などの形態を構成し、更に魂を引き込んで、現象界に出て行く様子が見て取れた。その生まれ変わりの元になる卵形の存在の中に亜希子の意識を探した。しかしそこにも亜希子を感じることは無かった。この高次元の事象はある特定の時空にフォーカスすることで、現象界的な形態を具現化する筈である。賢はそこに仏陀やイエスキリスト、人類が神や仏と崇める高貴な存在の意識をも感じ取ることができた。それは人間に対する愛と慈悲の意識を凝集した存在だった。賢は更に意識のフォーカスを行った。既にそこは地球的な意識を出て、太陽系全体に拡大した意識の領域のように感じられた。既に膳も悪も無くなっていることが分かる。賢も自己という認識が完全に消え、太陽系全体を包含する意識の状態になった。もう時空は無かった。少し強く意志を働かせると、太陽系の惑星の運行が自分の中に認識でき、その運行は自分自身の営みであり、そのつもりになれば太陽系の天体を自分の意識で自由に動かすことができるということを観て取った。しかし、現在の完全に均整の取れた太陽系の同期運行システムに働きかける理由も無く、必要性も感じなかった。太陽系全体が自分自身であるということを知った。その太陽系の惑星の中にも亜希子の意識を見出すことはできなかった。亜希子はその外に居るのだろうと賢は考えた。賢は以前、亜希子と共に意識の上昇を行ったことがあった。その時は宇宙を俯瞰しているような感覚を覚えたが、今度のように霊界から入った認識には、宇宙が自分自身であるという認識の方が強く意識された。賢は更に意識の集中を図った。自分の意識の中に銀河系がすっぽりと入った。不思議なことに銀河系の全ての要素が自分の

中にあることを感じた。何処にでもフォーカスすればその世界が現前した。賢は試しに銀河系の中に別の太陽系を探してみた。そしてそこに地球に似た天体を探そうとした。2000億もの星々がその実態を見せてくれた。その中には太陽系にそっくりの宇宙が沢山あった。しかし、我々の住む太陽系と同じ環境で地球と同じような条件を持つ星は無かった。賢はふと原の語録にあった「地球は人類が存在しているから、人類の存在に合った形で環境が整備されている」という言葉を思い出した。賢は意識を梓にフォーカスしてみた。梓は銀河系の端にある太陽系の中の地球上の日本列島の北海道、由仁の家のソファに腰掛けていた。大きなお腹をさすり、賢の帰りを待っているようだった。賢は祐子にフォーカスしてみた。それは驚くべき体験だった。祐子を意識した途端に現在自分の居る場所から地球上のアフリカ中央部に掛けて一本の光のすじが出来た。そして、アフリカ全体が明るい色で輝いているのが見えた。その輝きはコンゴの湖の近くの道路脇から広がっていた。そこに祐子が居た。祐子は亜希子の遺体を自分の胸に抱き締めていた。賢は亜希子の魂にフォーカスしてみた。しかし、そこでも亜希子の存在は見い出せなかった。更に何段階かの意識の拡大を経て、ついに賢の意識は宇宙全体に広がった。空間の一部に沢山の銀河が蜂の巣のように繋がり合っている。別の領域には広大な暗黒領域が存在している。宇宙空間全体が自分の中に存在していることが分かった。その認識は存在と非存在を分ける境界面のような位置にあることが賢には認識された。物理次元では12次の“複合象域”であり、意識的には人間だけでなく、あらゆる存在がその意志を働かせて存在している領域で、存在すること自体が真実であるということ、それ以外は全て付随する要素であることが認識できた。賢は亜希子を呼んだ。初めて亜希子から応答があった。

「あなた、あなたなのですか。こんな所までわたくしを探しに来てくださったのは、あなたに違いありません」

「亜紀、そうだ、俺だ、賢だ。俺と同時におまえでもある。おまえもおまえであると同時に俺でもあるんだ。空間的には砂漠の象であり、食べられた牛であり、蟻塚の蟻であり、路傍の石であり、川の水であり、火

星の岩盤であり、太陽の炎であり、シリウス伴星の鉄であり、枯葉に巣くう虫であり、大群の中の一匹の鱗の目の細胞の1つであり、大阪の道頓堀の橋の袂にある、居酒屋の焼き鳥を焼く鉄網の上の、数日前まで空を駆け巡っていたヒヨドリの腿の肉片の中の焼け焦げた細胞でもある。そして、地球自体でもあり、太陽でもあり、銀河系宇宙でもある。また、同時に1つの分子でもあり、原子でもある。クオークでもあるのだ。フォーカスすると全てが顕現し、それ自体に変化する。全てが俺の中、そして亜紀、おまえの中にある。それと同時にここは虚と実が一体となる場所だ。無に至る場所だ。ここから極に至れば、あの銀色の筋を伝わって核である暗黒の無の状態に降り、そこから一気にまばゆい爆発を経て拡張する世界に遷ることになるぎりぎりの場所だ。俺たちは今、虚実に渡る全存在の核の一手手前に居る。亜紀、おまえは現象界からここまで戻って来た。俺とおまえには今、個という実態は無くなっている。おれはおまえに話しているのではなく、俺自身に話している。ずっとここに浮遊しているつもりか？」

「いいえ、あなた、私はもう一度戻ります。自分の意志で戻れるものなら、可能なところまで戻ります。あの地球上の人類の意識が、この宇宙の整然とした運行に歪みをもたらしていることを感じるから、それを修正する為にできる限りのことをしたいと思うのです。この広い宇宙の中で、宇宙に歪みを作っているのは地球の他にもいくつかの星がありますが、いずれも急激にその寿命を短くして、ブラックホール化したり、あるいは大爆発を起こして宇宙の塵と化したりしてしまっています。わたくしは地球を愛しています。地球はわたくしたちを育ててくれた母です。わたくしは、地球をそんな目に遭わせたくありません。ですから、最も歪んでいる地球上の人間の心を元の美しい心に戻したいのです。わたくしは、死んでこちらに来る途中で、自分が思うことが周りの沢山の存在に自然に伝わることを知りました。わたくしはこれからお姉様の近くに戻り、アフリカの既に亡くなってしまった人たちの魂にお話をしてゆきたいと思っています。どれだけの人が理解してくれるか分かりませんが、少なくともわたくしの考えを伝えることができるようだという事は確

認できました。私は今、全てが自分であることを認識しています。でも、どうやってあの由宇お姉様の元に戻ったら良いのか、果たして戻れるのか、それとも永久にここに留まらなければならないのかと、混沌とした意識の状態になっています。あなた、私を導いてください。もう一度あの地球の、あのアフリカの大地に私を戻してください」

「亜紀、俺と一緒に戻ろう。おまえの肉体は死んだときのままの状態を維持している。俺は現象界に戻ったら、先ず祐子に頼んでおまえの遺体の治療をしてもらう。傷を治し、いつでも生き返ることができるようにしておく。しかし、魂が一度死んだ肉体に入ることが許されるかどうかは分からない。それは宇宙のしくみをいじることになるからだ」

「あなた、既に私はあなたの意識の中にあります。このまま私を伴ってお姉様の元に戻って頂きたいです」

賢は自分の意識と亜希子の意識が融合するのを感じた。賢は次第に意識の焦点を緩め、地球意識にまで下降した。そこにはムクウの意識が待っていた。

「ムクウさん、亜紀を連れて戻って来ました。亜紀は今私と一体になっています。これからどうやったら、亜紀を生き返らせることができるのでしょうか？」

「賢、それは難しいだろう。宇宙の運行システムと同じで、簡単に動かすわけにはいかない。それに手を加えるということは、この宇宙のしくみに手を加えることになる。おまえも知っているとおおり、原子炉で起きる核反応が原子レベルで巨大なエネルギーを生み出しているが、この宇宙のしくみをいじるといことはそんな生やさしいことでは無い。3時間限的には一歩間違えば、と言うより少し匙加減を誤れば、地球などあつという間に消えてしまう。まだそれが起きる段階にはない。エントロピーは拡大方向に向かっているのだ。だから、唯一亜紀がもう一度現象界に生き返れるときは、この地球現象界の属す象域の段階が高くなり、現象界と虚空間の変換が起きるときしかないだろう。それは短時間かも知れないし、長期間にわたって起きるかも知れない。わしの認識ではそう感じられる。それは、現在の地球の規範が変化するときだ。原友昭の作

った物質転送機が無くても、自分の意志で自由にあらゆる物の物質転送、物質化、虚存在化が可能になるときだ。その時は既に死している生命は、望みさえすればある特定のインターフェイスを通ることで生き返ることができるようになる筈だ。しかし、その段階では、既に生と死の区別も無くなっているから、蘇生する必要もないがな。全ての存在が虚・実の間つまり、現象界と霊界との間を自由に行き来できる筈だ」

「そんな、時が来るのですか？」

「おまえ達はその先鞭を付けるために生まれ出ている。来るべき時代の先駆けとしてな。だから、亜紀の魂はアストラル界でおまえから分離させたらい。亜紀は、暫くはそこに住み、人々に心のあり方を説き、必要なときにエーテル界に入って、現象界の人間達を指導してもらおうというのが良いと思う」

「分かりました。亜紀をご両親の元に連れて行きます」

賢は亜希子と共に更にアストラル界まで下降した。両親は賢の姿を見て、複雑な思いを抱いた。娘が高いレベルにまで到達しているのを、賢が自分達の居るレベルまで連れて下降して来たことに、割り切れないものを感じた。しかし、目前に亜希子の姿が顕現すると、ふたりは歓喜の渦に包まれた。

「あなた、ありがとうございます。私はまた両親と過ごせるのですね。こんな幸せはありません」

「亜紀、いずれまた君を迎えに来る。それまでご両親と幸せに過ごしていてくれ」

「あなた、分かりました。永遠に愛しています」

賢はそこで3人と別れ、更にエーテル界に下降し、再び祐子の元に顕現した。ジミーとメドリスナは恐怖を覚えたが、一歩引いて成り行きを眺めていた。祐子は亜紀を抱きしめたまま涙を流していた。賢は祐子の肩にそっと手を触れて言った。

「由宇、亜紀はもう生き返らせることはできない。直ぐには手の届かないところに逝ってしまった。亜紀の心はあまりにも純粹で、何の引っ掛かりも無いから、一気に自分の核心に戻った。俺は亜紀と逢って話して

来た。亜紀はおまえの近くに帰りたと言っていた。しかし、今はそれは許されないことだ。いずれ、世界は変わるだろう。その時は亜紀に会えるかも知れない。しかし、果たして我々が活着ている間にその時が来るのか、来たとしても何時になるかは分からない」

「亜紀が可愛そう。この世界であなたと私と3人で平和に活着ることを夢見ていたのよ。もうそれもかなわなくなってしまったのね。えーん、えーん」

「由宇、泣くな。決してそんなことはない。俺たちは一体だから、いつも亜紀は俺たちの心と繋がっている。由宇の知っているとおりに、全ては意識で成り立っている世界だ。常に亜紀が俺たちの元に戻ることを意識していれば、必ずそうなる」

賢の言葉を聞いても、生命が永遠だと知っていても、この世界で再び生きた亜希子の姿を見ることができないかも知れないと思うと、祐子の目から涙が止めどなく流れるのだった。賢は祐子に言った。

「由宇、もし亜紀が生き返ったら、その時宿る肉体が正しく機能しなくてはまずいだろう。難しかも知れないが、亜紀の遺体の傷を修復してくれるか？今、亜紀の身体は、細胞が分解を起こさないように、生命の銀線を通さずに、時空間を通して直接に働き掛けるというきわめて難しい方法で、身体的全細胞に結束を維持させるように転生システムから働き掛けている」

祐子は涙を拭くと、意識を亜紀の身体の中に集中し、弾丸を受けて亀裂が生じ、破壊されている組織の再構築を行った。それは10分間ほど続いた。やがて祐子は瞑想を解くとぐったりと疲れた様子を見せながら言った。

「あなた、亜紀の身体は全て元通りに戻しました。でも、亜紀は生き返らないのですね・・・」

賢は黙って頷いた。

風が止み、雨も上がった。空は元通り晴れ上がり、辺りは静まり返っている。戦闘も止んでいた。道路や草の上に兵士達の骸が散らばっている。4台の車は焼け焦げ、弾痕でぼろぼろになっていた。道の反対側から兵

士達が銃口を下に向けてゆっくり祐子達に向かって進んで来た。先頭を歩いて来るのは、森の奥の村を襲ってきた時に先鋒だった男だ。戦う意志のないことはその雰囲気ですぐに分かった。祐子達の近くに来ると、男達は銃を地上に置き、片膝を着いた。先鋒の男が言った。

「*****」(私たちを、あなたの部下にして頂けませんか?)

祐子は赤く腫れ上がった目で男達をじっと見詰めた。祐子が何も応えないので、男は続けた。

「*****」(私たちは、目的のない戦いをしてきました。唯、生きる為だけに戦っていました。手段を選ばず、相手を討ち滅ぼしてあらゆる物を手に入れようとし、殺戮と略奪を繰り返す戦闘集団に成り下がってしまいました。あなたに助けて頂くまでは、自分達の姿に気が付きませんでした。我々はあなたたちを殺して、荷物を奪い、それを糧にしようと考えていました。しかし、この間のあなたの行為を見て、ただ生きているだけでは何の意味もないことが分かりました。生きているときに何をしているかが問題なのだと分かったのです。それを教えてくださったのが、あなたの行為です。自分達を殺そうとして襲ってきた人間の命を救ってくださったのです。それはとりもなおさず、唯欲望に突き動かされて生きていた自分達を戒めた行為でした。これからは私の軍隊はあなたのために生きます。ゴマにも、ブカヴにも、キサンガニにも、キンサシャの近くにも我々の軍は駐留しています。当初はクツの難民を救済する目的で立ち上げた軍です。我々は政府軍やルワンダ軍に対抗し、あのジェノサイドを行った我々種族の仲間の攻撃からも逃れ、古くからこの地に生きてきた本当に苦しんでいる我が民族を、救済するために立ち上がったのですが、現在ではそのことも忘れ、一日一日を生きるために戦う乞食戦闘集団に成り下がっていました。あなたに出会い、もう一度この国の平和のために戦おうと想いを新たにしました)

祐子は漸く口を開いた。

「*****」(分かりました。しかし、1つだけ条件があります。私たちは戦うのではなく、お互いに助け合わなくてははいけないということです。どんな理由があっても、相手を殺してはいけない。この条件を守

ると約束してくれたら、今からでも、あなた方は我々の仲間です)

指揮官は暫く黙って考えていたが、意を決したように言った。

「*****」(もうこれからは2度と人を殺しません。どんな激しい戦闘状態になっても、相手を殺すために戦うことはしません。それで良いのでしょうか?)

「*****」(あなた方も兵士なのだから、戦わなければならないこともあるでしょう。しかし、正義を守るためにだけ戦ってください。何時も敵の男達にも家族が居ることを意識しながら、本当の正義の為に戦うのです。私は今、敵の銃撃で最も大切な妹を失ってしまいました。その敵は全てあなた方の銃弾に倒れました。私は、その中で負傷はしても命だけは取り留めた人たちを救います。それを手伝ってください。それが済んだら、私は国連事務総長に会うためにゴマに移動します。ゴマまでの私たちの移動を援護してくれますか?)

「*****」(倒した敵を助けることは、私たちにはできません。あなたの指示に従うだけです。勿論その後で、ゴマまであなた方を無事お連れ致します。妹さんのご遺体はどうされますか?)

「*****」(この方、内観賢さんが、日本まで運びます)

祐子は賢の方を見た。賢は頷き、亜希子の遺体を自分の胸に抱き上げると、札幌の家に向けて一気にテレポーションした。亜希子の遺体を両手で抱えた賢の姿が一瞬にして消えたので、周囲に居た者達は驚いて後ずさりし、怖れを覚えてその場に座り込んだ。

由仁の家には、梓が心配そうにソファーに座って待っていた。賢が亜希子を抱いて現れたので、梓はソファーから立ち上がると直ぐに賢の元に駆け寄った。意識が安定すると、賢は言った。

「梓、戻ったよ」

「あなた、お帰りなさい。亜希子さんどうなされたのですか？」

「亜希子は死んでしまった」

賢は亜希子の遺体を両手で抱えてソファーまで移動し、ソファーの上に横たえた。亜希子の遺体は衣類が血で染まっていた。梓は亜希子の顔を

覗き込むようにして語りかけた。

「亜希子さん、亜希子さん、どうして・・・」

梓の頬を涙が伝わって落ちた。

「胸と腹部に銃撃を受けたようだ。亜希子の魂を追ったが、既に遅かった。亜希子はあつという間に霊界の最も深い階層にまで戻っていた。勿論霊界では様々なプロセスを経たようだが、こちらの時間ではほんの一瞬のことだった。ムクウさんの力をして蘇生させることはできなかった」

「ど、どうして銃撃など受けたのですか？」

涙を拭いながら、梓が訊いた。

「コンゴ民主共和国の東部、サク市の西側の山道で3つの軍の戦闘があった。亜希子達はそれに巻き込まれたんだ。その中の1つの軍の兵士達に祐子と部下の兵士達が危うく拉致されそうになったとき、亜希子が兵士達の気を逸らせ、更に恐怖感を与えるため、テレポーテーションで高い木の上へ移動し、そこから空中を飛行したんだ。殆どの兵士は怖れおののいて退散したが、指揮官の男がいきり立って亜希子を銃撃した。その銃弾を受けて、木の天辺から落下し、亜希子は亡くなった」

「あなた、亜希子さんの魂とは会うことができなかったのですか？」

「いや、何とか逢うことはできたが、この現象界に連れ戻す・・・つまり蘇生させることはできなかった。霊界に居るムクウさんが、うまくすればあるタイミングで蘇生できる可能性があると言っていたが、それが何時なのかは分からない。この世界の規範が大きく変わる時らしい。今、亜希子は霊界のアストラル界に戻っていて、この世界に蘇生できるようになるまでの間、ご両親と一緒に生活しながら、人々の魂の救済をすることになった。亜希子の遺体は祐子が治療し、元の身体に戻した。天界の意志で、亜希子の身体は朽ちることなく維持されることになっている。だから、我々は外的な傷を受けたり、細菌の感染が起きたりしないように亜希子の身体を守らなくてはならない。亜希子の遺体は俺の部屋に保護しておこうと思う」

「分かりました。でも、水分や栄養分を摂らなくても身体が正常な状態

を維持できるのでしょうか？」

「丁度冬眠のような状態になるんだろうね。心臓も止まり、血液の循環も無く、内臓は何の活動もせずに、現在の状態に留まっているだけだから、一切の代謝などのエネルギー消費が無いのだろう。だけど、免疫や抗菌の作用も停止しているはずだから、細菌類の進入だけは押さえておく必要があると思う。俺は内部を無菌状態にした特製の棺を部屋に置いて、その中に亜希子を横たえておこうと思う」

「そんなことってあるのでしょうか？」

「いろいろな実例があるよ。パラマハンサ・ヨガナンダや聖女パラスキーバ、聖ベルナデッタ、聖テレーザ・マルゲリータなどだ。実際肉体自体は腐らなくても外部の環境変化や細菌類の侵入から肉体を守り維持するのが難しいから、次第に元の形が失われてしまう。亜希子にはそんな風になってほしくないから、棺を特注で用意しようと思うんだ」

梓はソファの横の床の上に腰をおろし、亜希子の手を取った。亜希子の身体はまだ温かかった。焦げ茶色に塗られた顔の下の襟からは白い肌が覗いている。

「亜希子さん、亜希子さん、戻って来てください。私、待ってますからね、お願いだから……元の元気な姿を見せてください……」梓は言葉に詰まってしまった。賢は少しの間梓をそのままにしておいたが、やがて静かに亜希子の遺体を抱きかかえ、自分の部屋に向かった。部屋に入ると遺体を自分のベッドの上に静かに横たえた。

「梓、亜希子の葬儀は行わないぞ。それに藤代さんにも連絡しない。亜希子の肉体はずっと側に置いておきたいから……」

梓は頷いた。

夕方になって愛子が帰って来た。愛子はドアを開けると直ぐ、家の中の悲しみに満ちた雰囲気を感じ取ったようだった。部屋に誰も居ないので賢の部屋を覗いてみた。賢と梓がベッドの横に椅子を置いて、無言で坐っていた。ベッドに女性が寝ている。愛子は声を抑えて言った。

「賢パパ、梓さん、ただいま。どなたか具合が悪いの？」

「愛子おかえり」

「おかえりなさい」

「愛子、亜希子が死んでしまった」

「えっ！」

愛子は鞆をその場に落とした。直ぐにベッドの側に駆け寄った。

「あ、亜希子さん、嘘でしょう・・・亜希子さん・・・」

愛子の目から涙がぼたぼたと落ちた。

「賢パパ、どうしたのよ？亜希子さん、どうして死んでしまったの？」

「祐子を助けようとして、銃弾に倒れたんだ」

「私の大切な人が、また一人亡くなった・・・なぜなの？どうして死んでしまうの？」

賢は立ち上がると、愛子の頭を胸に抱き寄せた。

暫くして、原友昭が帰って来た。原もこの家のただならない雰囲気を感じ取っていた。まっすぐ賢の部屋に向かうと、そこに展開されている悲しみに満ちた情景に呆然と立ち尽くした。原は一言も言葉を発さなかった。亜希子を横たえてあるベッドに近寄り、唇を噛み締めた。原の目に涙が光った。

梓は夕食の支度をすると行ってベッドから離れ、うなだれて力なく賢の寝室から出て行った。愛子も一旦自分の部屋に戻り、それから梓を手伝うためにキッチンに向かった。賢と原はベッドの脇の椅子に腰掛けた。

「蘇生できなかったんですね」

「亜希子には、霊界での使命があるようなんです。肉体は生前の状態が維持されるようです」

「これからはOVSで話すしかないですね」

「時期が到来すれば、蘇生できるかも知れません。それまで、亜希子の身体は僕が守ります」

「後で、僕が無菌処理を施した棺の注文をしてきます。僕に任してくれますか？」

「僕もそうしたいと思っていたところです。よろしくお願いします」

「分かりました。祐子さんは一人になってしまって、悲しんでいるでしょうね。大丈夫でしょうか？」

「僕は祐子を助けるために、これから何度かアフリカにテレポーテーションします。可能な限り国内に留まるように努めますが、諏訪の方が手薄になることは否めません。原さん、よろしくお願いします」

「分かりました。樋口さんと一緒に賢さんの分まで頑張ります」
ふたりは暫くの間、その場を離れなかった。

原が棺の注文するために出て行ってから、少しすると賢に祐子からテレパシーで連絡が入った。

「あなた、亜紀は、亜紀の身体はどうなりましたか？何時もあなたの近くにおいてあげてくださいね。いつ生き返っても、あなたが近くに居るようにしてあげてくださいね」

「うん、そのつもりだ。今、俺のベッドで横になっている」

「あなた、お願いね。私、明後日、国連事務総長に会うことになっているの。亜紀の意識と一緒に、このままゴマに向かうわ。あそこは戦闘地域だから、何かあったらまた助けを求めることになるかも知れないけど、お願いね」

「分かっているよ。いつでも連絡してくれよ」

亜希子の遺体と共に賢が消えてしまうと、途端に激しい寂しさが祐子を襲った。身体が冷たくなってきて、がたがたと震えだした。袖口で涙を拭くと、祐子は目を瞑って深呼吸をした。何度も深呼吸を繰り返していると次第にからだが暖かくなってきた。祐子は目を開けてジミーとメドリスナに向かって言った。

「*****」(さあ、まだ息のある人たちを救いましょう)

マリーとソニアがおそろおそろ車から出て来た。辺りをきょろきょろ見回し、祐子の所に駆け寄って来た。

「*****」(ママ、怪我はありませんでしたか？戦闘は終わったようですね)

「*****」(ええ、戦闘は終わったわ。沢山の人が犠牲になったわ。今から、助かる可能性のある人たちの治療をするから、手伝ってちょうだい)

ソニアは救急用具を取りに急いで車に戻った。マリーが辺りを見回して言った。

「アキさんの姿が見えないようですが、まだ車の中ですか？」

「マリー、亜紀は死んでしまったのよ」

「えっ！ で、でも、どこ、姿見えないです」

「遺体は賢さんに日本に連れて行ってもらったわ」

「そ、そんな、ママ冗談です？本当は、アキさんどこですか？」

「ほんとうに亡くなったのよ。私はまだ身体が震えている。だけど、戦闘で負傷した人たちを助けるのが先よ」

祐子はそう言うと、直ぐに倒れている兵士達の脈を取って歩いた。祐子に下った兵士達も祐子に附いて歩き、散らばっている武器を拾い上げながら、兵士を起こしたり息を確認したりした。倒れている大勢の兵士の中で5人だけがまだ息があった。祐子はその兵士達の身体から弾丸を取り除き、治療を行った。兵士達の傷は直ぐに回復したが、まだ身体を思うように動かせないようだった。祐子はアルフォンとベムに命じて命拾いした兵士達の側にペットボトルの水を置いてあげた。全ての治療が済むと、祐子は部下となった先鋒だった兵士に向かって言った。

「*****」(あなたの名前は?)

「*****」(私はムドルムング・ブムニサンと申します。この2人は私の直属の部下でリゲンズ・トリグニとダガバ・ムマンダンと申します。リゲンズは足の速い男です。ダガバは射撃の名手です。オリンピックにでも出れば、それなりの成績を上げられるほどの腕前を持った男達です。後の兵士達も紹介したいところですが、覚えきれないでしょうから追々紹介してゆきます)

「*****」(ありがとう。私の名前はユウコ。私の仲間達も紹介するわね。これがジミーとメドリスナ、そしてあそこに居るのが、アルフォンとベム、ふたりの女性は年上の方がマリー、若い方がソニアよ。ジミー、アルフォン、運転頼むわね。それじゃ出発しましょう。ムドルムング、後で私たちを追って来てね。夕方までにゴマの空港側のホテルエグゼクティブ・パレスに着かなければならないから、悪いけど先にゆ

くわ)

一行は戦利品の武器を外からは分からないように荷物の下の方に積み込むと、焼け焦げた車を避けるように元の通りに戻った。アルフォンが先行し、ジミーが後を追った。そこから暫くは周囲に気を使いながら、ゆっくりと車を進めた。皆車の中に戻ると空腹を感じてきて、フフのサンドイッチを頬張った。やがて車は生々しい戦闘の傷跡が残っているサクの町に差し掛かった。そこでまた検問を受けた。その検問は手短に済ませてもらえた。こんなこともあるのだと、祐子は胸を撫で下ろした。もし亜希子が居たら、「おねえさま、ずいぶん簡単でしたわね」などと言って簡単に通り抜けられたことを喜んだに違いないと思い、涙がこみ上げてきた。事無くサクの町を通り過ぎることができた。兵士達は細心の警戒を怠らなかったが、どこからも攻撃を仕掛けられることはなかった。サクの町を通り過ぎて暫くは建物の影を見なくなった。時々南方に湖が見える。キヴ湖だ。やがてキヴ湖から離れた小さな湖の北側の丘の上を掠めて通った。少し行くとまた検問にぶつかった。大勢の民兵達が、何をするでもなく、あちこちうろつき廻っていたが、2台の車が近付いて来ると、一斉に車に向かって集まって来た。3人の若い民兵がアルフォンの車に近付き、窓を開けるように手招きした。アルフォンは窓をほんの少し開け、外の話し声が聞こえるようにだけした。民兵は先ずパスポートを見せるように要求した。4人はパスポートを翳して見せた。民兵はパスポートを渡すように言ったが、4人はそれを翳し続け、言葉が分からない態を装った。民兵達は仕方なく感じたようだが、それでも執拗に質問を投げ掛けてきた。マリーが片言のリンガラ語でわざとちぐはぐな説明をした。アルフォンとベムはあくまで言葉が分からないというスタンスで通した。検問官はとうとう根負けした。

「*****」(強い兵隊さん、頑張って。タバコあります)

マリーは世辞を言いながら、喋りまくっていた相手の男にタバコ1カートンを渡した。男は漸く車の通過を認めた。祐子は「あちこちにある検問所は、どれも政府の検問所なのだろうか？」と疑問に思った。それにしても検問官の身なりや態度があまりにもそれらしくなかった。ふと周

囲を見回すと、銃を手にした沢山の民兵達が2台の車の直ぐ両脇に近付いて来ていて、荷台の幌をつまみ上げて中の荷物を覗いている。アルフォンとジミーは言い合わせたかのように、殆ど同時に車を急発進させた。幌をつまみ上げて中を物色していた兵士が、振り払われたように車から離れた。兵士達は大きな声で何か叫んでいる。アルフォンとジミーはアクセルを思い切り噴かした。民兵達が後を追って来て、車に向けて銃を構え発砲した。しかし、2台の車は被弾すること無くその場を逃れることができた。全員が胸を撫で下ろしたのもつかの間、今度は遠方から装甲車の一隊が向かって来た。祐子はその車に嫌な戦慄を覚え、攻撃の意図を感じ取った。

「*****」(ジミー、あの装甲車は攻撃を仕掛けてくるわよ。道を外れて)

祐子は直ぐにトランシーバーでマリーにもそのことを伝えた。マリーは了解し、2台の車は民家の間にある脇道に入り込んだ。装甲車もその脇道に入って来た。装甲車からの銃撃が始まった。それは威嚇では無かった。明らかに祐子達を狙って銃撃してきている。ジミーが家の影に車を停めると、アルフォンもその直ぐ後に車を停めた。

「*****」(メドリスナ、ここは俺に任せて、おまえが運転してママをホテルにお連れしろ)

「*****」(ま、まで！俺が・・・)

メドリスナが叫んだが既にジミーが銃を手にして外に飛び出した後だった。

後続の車からベムも飛び出した。メドリスナは急いで運転席に移り、エンジンを噴かし民家の間の道を直進した。アルフォンも車を発進させ、メドリスナの後を追った。行き当たりばったりだったが、運良く元の通りに出ることができた。メドリスナは思いきりエンジンを噴かせた。飛び出した2人は民家の土塀の影に身を潜め、接近して来る車めがけて発砲した。2人は車のタイヤを狙ったがなかなか当たらない。敵の車が直ぐ目の前を通過したとき、ベムの撃った弾丸が装甲車の前輪に命中し、車がハンドルを取られ、回転して急停車した。車から銃を手にした20

人ほどの男達が飛び降りて来た。ベムとジミーは必死に男達を狙って撃ちまくった。ベムが被弾し、倒れた。ジミーは急いでベムを塀の陰に引っぱり込んだ。ベムは胸と脚を打ち抜かれ血だらけになっていた。ジミーはベムを介抱しようとしたが、銃撃が激しいので、敵に立ち向かわざるを得なかった。一瞬の隙にジミーの居る民家の土塀の周囲が敵に包囲された。

「*****」(銃を捨てて、出てこい。命は助けてやる)

ジミーは壁の影に身を隠したまま動かなかった。周囲を取り囲んだ民兵達が一斉にジミーに向けて射撃した。ジミーも必死に応戦したが、多勢に無勢で、遂に左腿に被弾してしまった。脚を引きずりながら体制を立て直すと、急に腕の力が抜けてしまったようになり、銃を持っていることができなくなってしまった。ジミーは自分が右肩にも被弾していたことに気付いた。しかし、もう打つ手は無い。最早これまでと諦めて、目をつぶりかけた瞬間、兵士達の銃撃が急に激しさを増したかと思うと、意識が朦朧としてきて全てが霞んで見えにくくなってきて、ぼんやりと見える敵の兵士達が次々に倒れ始めた。ジミーは何が何だか分からなくなり、ついに体勢を保つことができず、全身の力を失ってその場に倒れた。ムドルムングとリゲンズ、ダガバの3人が倒れているベムとジミーの側に駆け寄った。リゲンズがジミーを抱き起こして言った。

「*****」(おい、しっかりしろ、ジミー、ベム。ユウコは無事か?)

「*****」(ママユウコ・・・無事・・・ベム・・・やられた)

ジミーは片言のリンガラ語で応えた。そしてそのまま意識が遠のいた。

ゴマ

祐子達の車は全速力で必死に走った。道路の両脇に時々数人の人々が重なるように倒れている。明らかに死んでいるようだ。あちこちに焼け焦げた車が乗り捨てられている。建物がちらほらと現れてきた。車窓からだが、殆ど人の気配を感じない。祐子は地図からそこがクシェロという

町だと知った。車は砂煙を巻き上げてその町も全速力で走り過ぎた。やがてゴマの町に入った。ゴマはやはり都会だ。建物も密集している。祐子がマリーに連絡して、ホテルまで誘導するように告げた。メドリスナはアルフォンの車に先に行かせるためスピードを落とした。アルフォンの車が追いついてゆく。アルフォンは片手を上げて通過した。マリーとソニアは後部座席に蹲っていた。メドリスナは直ぐにその後続いた。この町にも戦争の爪痕が沢山残っていた。壁が無傷な家は全くと言っていいほど無い。どの家の壁にも弾痕や、崩落の跡が残っている。まさに戦闘地域だった。空港までは直線路だ。少し行くとアルフォンの車は右折した。マリーからトランシーバーの連絡が入った。

「ママ、空港はルワンダとの国境付近です。ホテルあまり無いですが、今日のホテル、安全思います。ゲートあります。ホテル、湖の近くです」ホテルは3階建てで、大きな柵で囲われていた。ゲートには制服を着た4、5人のガードマンが居て、近づいて来る車に注意を払っている様子が見て取れた。アルフォンは車をゲートの前に停めた。直ぐにガードマンが近付いて来た。

「*****」（我々はルワンダにあるフルマという会社の人間だ。ここで国連事務総長との会談を予定している）

ガードマンの一人が直ぐに取り次ぎにホテルの建物に向かった。少しして戻って来ると、ガードマンはゲートをオープンした。セキュリティが確保されていることに全員安堵した。アルフォンとメドリスナは車をエントランスに横付けした。祐子はバックパックを背負って降りた。マリーもバッグを手にして直ぐに降りて来た。ソニアは一旦車から降りたが、ジミーの姿が見えないことに気付いたのか、残って荷物の確認をしてみると言って再び車の中に戻った。マリーは全員のパスポートを集めた。祐子はマリーの後に附いてエントランスを入った。ホテルのロビーは祐子達が久しぶりに見るきちんと清掃された空間だった。応接用セットが4組あり、入り口側の奥のソファにはカジュアルな服装をした壮年の白人2人、黒人2人の4人のグループが陣取って寛いでいる。フロントに近い側のソファには背広にネクタイを締めた年長者一人と若い男2人の

東洋人が坐って顔を寄せ合って何か話していた。マリーが彼らを意識したのか、日本語を使わずにスワヒリ語を使って祐子にソファーで待つように言ってから、フロントに向かった。東洋人の話し声が祐子の耳に入ってくる。明らかに日本人だ。若い男達が話している。

「全く、こんな戦闘地域に派遣させられるなんてついてないな。さっきも外で銃撃戦の音がしていた。危なくて外になんて出られやしない」

「仕方ないだろう、財政支援をするかしないかの判断なんだから、当然戦闘地域の状況だって把握しなくちゃならないだろう。俺たちが受けなけりゃ、誰か他の奴にアサインされていただろう。後で臆病者呼ばわりされたくないじゃないか」

「それはそうだが、大体フルマなんて企業は聞いたことも無い。事務次官が、そこの社長が日本人のようだなんて言い出さなきゃ、こんな割に合わない役が日本に回ってくることも無かったんだ。大体、ママユウコなんて名前は何処の国にだってありそうな名前じゃないか」

祐子はドキッとしたが、知らぬ振りをしていた。

「まあ、そう言うな。ママユウコとは謂っても、正式な名前はユウコ・ツグンショウっていうんだから、日本人とは限らないじゃないか。事務次官が日本に打診してきた訳は、ここでの会議に立ち会って欲しいなんていうのは表向きで、本心は日本から金を引き出させることにあるんだ。日本がこの国の支援を宣言しているから、国連から依頼があって当然だろう」

年配の男が言った。

「君たち、いくらアフリカ奥地の戦闘地域に居るからと言って、日本語なら何を話しても大丈夫って訳じゃないぞ。政府の代表団という立場なんだから、少し注意した方が良い」

ふたりの男性はハッとしたようだった。

「済みませでした」

ひとりが謝った。もうひとりも下を向いてしまった。マリーはチェックインの手続きに時間が掛かった。祐子は何気なくゲートの方に目を向けた。誰かがゲートでガードマンと言い争っているように見える。よく見

るとゲートの向こう側にいるのはダガバだった。ムドルムングの姿も見える。祐子はさっと立ち上がり、直ぐにエントランスから外に出た。既に2台の車は移動してしまったようで、メドリスナとアルフォンの姿も無かった。祐子がゲートに向かって駆けてゆくと、いつの間にか袋に入れた小銃を持ったメドリスナが祐子の跡を追って駆け寄って来た。

「*****」(メドリスナ、車や荷物はどうなったの?)

「*****」(はい、車は駐車場に置きました。周囲が壁で囲われていて、鉄条網も張ってありますから、重い物はとりあえず車の中に置いて、直ぐに取り出せる物だけ選り分けました。これからロビーに運び込みます)

その時、ゲートの方でガードマンの大きな怒鳴り声が聞こえてきた。祐子は急いだ。メドリスナは祐子の前を出て小走りに走った。ゲートではガードマンとダガバが言い争っている。2人のガードマンがダガバに向けて銃を構えている。どうやら、ガードマンが彼らの入場を拒否しているようだ。一人のガードマンが祐子に近づいて来た。祐子は直ぐにガードマンに言った。

「*****」(この人達は我々の仲間です。今回の国連事務総長との会談の護衛を担当している人たちです)

ガードマンは引かなかった。

「*****」(いや、こいつらは ρ CDか α FDLの者達だ。信用できない。大体、武器を持っているのが怪しい)

祐子が言った。

「*****」(それなら彼らがホテル内に入っている間、彼らの武器をそちらに預けておきます)

銃を没収できることになると、漸くガードマンは納得して3人からカラシニコフを受け取り、ゲートをオープンした。車は構内に入ると、祐子の前で止まった。祐子は運転しているムドルムングにそのままエントランスまで走るように告げた。エントランスに着くとムドルムングが車を降りて来た。

「*****」(ユウコ隊長、車の中にジミーとベムを隠しています。

銃撃を受けて負傷しています。2人とも意識を失っています。病院に連れて行ったのですが、拒否されました。今、リゲンズが付き添っています。彼らは出血がひどいから、早く処置しないと危ないと思います)

祐子は驚いた。

「*****」(ジミー、命がけで私を守ってくれたのね。ありがとう。

2人を直ぐにホテルの中に運び込んでください。私が治療します)

メドリスナがムドルムングを手伝ってジミーを車から運び出した。メドリスナがジミーの上半身を抱きかかえるようにして言った。

「*****」(ジミー、しっかりしろ)

ジミーの肩と左脚には布が巻き付けられている。布には血が滲んでいた。どこかに身を隠していたのか、いつの間にかソニアが駆け寄って来てジミーに縋り付いた。

「*****」(ジミー、ジミー、しっかりして、ジミー、わーんわーん)

ソニアは大きな声で泣いた。ムドルムングとメドリスナは苦心してジミーの身体をエントランスからロビーに運び込んだ。それに続いてリゲンズとダガバもベムを車から運び出した。ベムも肩から胸に掛けて布が巻き付けられている。祐子が先頭に立ってエントランスを潜ると、4人の兵士が、泣き叫びジミーに縋り付くソニアを引き摺るようにしてふたりの負傷兵を運び込んで来た。ベルキャプテンが怪訝な顔をして大声で言った。

「*****」(お客さん、その方々はどなたですか?)

「*****」(今夜ここに泊まる仲間です)

祐子が応えた。

「*****」(仲間って言ったって・・・)

ベルキャプテンはフロントを窺った。フロントから支配人とおぼしき男が飛んできた。

「*****」(一体、どうしたんですか?)

「*****」(今夜ここに宿泊する仲間ですが、怪我をしていますから、ソファで少し休ませてください)

祐子が言った。支配人は祐子を導いて空いているソファーに案内した。メドリスナとムドルムングがソファーの上にジミーを横たえた。ベムも隣のソファーに横たえられた。マリーが駆け寄って来て、泣き叫んでいるソニアをジミーから引き離し、自分の胸に抱き寄せた。ロビーは騒然となった。4人の男達と3人の日本人達は立ち上がってその場から離れ、壁を背にして様子を見ていた。祐子は直ぐふたりの脈を取った。ふたりとも意識は無かったが命は取り留めているようだった。フロントから3人の男達が駆け付けて来た。マリーは泣いているソニアを抱き締めたまま、顔面を蒼白にして棒立ちになっている。ロビーに居た人々が寄って来て、ふたりの負傷兵の周りには人垣が出来た。祐子が大きな声で言った。

「*****」(今から、このふたりを救います。皆さん、暫くの間静かにしててください。ソニア、救急箱を持って来なさい)

その声を聞くとソニアはマリーの胸から離れ、外に走り出て行った。辺りは水を打ったように静まり返った。祐子は直立し、天井を見上げて、両手を上に掲げ、瞑目して瞑想状態に入った。ロビーが急に明るくなった。祐子はゆっくり両手を降ろしてソファーの上に横たわっているふたりの兵士の胸の方向に両掌を翳した。天空からプラナのエネルギーが自分の頭頂のチャクラを通して自分の身体に注入され、体内を通り抜けて両掌の労宮から、ジミーとベムの太陽叢のチャクラに注入されるところをイメージした。祐子は意識を集中し、ふたりが生氣を取り戻してきた状態を手前の空間に描き出し、それをソファーの上の2人に重畳させた。

「*****」(ジミー、ベム、ありがとう。おかげで私たちは助かりました。今、あなたたちは意識を取り戻しました。暫くの間苦しいでしょうが、我慢しててください。直ぐに治りますからね)

そう言うと、ジミーの頭が少し動き、額に皺を寄せた。ベムは膝を曲げて脚を立てた。周囲の者達からどよめきが起きた。ソニアが救急箱を抱えてエントランスから駆け込んで来て、祐子の側に来た。祐子はジミーに近付くと、肩を縛っている布きれを取り除き、服のボタンを外して胸を開いた。ジミーの筋骨逞しい肩に撃ち込まれた弾丸による傷が露わに

なった。祐子は再び瞑想状態に入った。ジミーの肩に銃弾が留まっているのが分かった。瞑目すると、祐子は右手の人差し指を傷口に立て、そのまま差し込んだ。血が吹き出てきた。ソニアが両手で自分の目を覆った。少しすると、祐子の右掌に弾丸が載っていた。祐子は左掌を傷口の上にそっと掲げた。祐子が手を外すと、肩の傷は消えていた。周囲から再びどよめきが起きた。祐子はジミーの腿を縛っている布を解き、ベルトを外し、ズボンを膝まで下げた。左の太腿が血で染まっている。祐子は再び透視を行った。腿には弾は残っていなかった。祐子はソニアの差し出すオキシドールを含ませたガーゼで傷口を拭いた。ジミーが悲鳴を上げた。皆緊張した。祐子は悲鳴など気にもとめず、ジミーの腿の傷口に左手を翳して瞑目した。みるみる傷が塞がった。祐子はジミーに話し掛けた。

「*****」(ジミー、痛かったです。傷は治ったわ。少し違和感があるかも知れないから、今日は部屋で休んでいなさい)

ジミーは身体を起こそうとしたが、祐子は肩を押してそのままそこに横たわっているようにさせた。ソニアがジミーに駆け寄ってジミーの顔を撫でた。ジミーは微笑みを浮かべた。祐子は次にベムの所に行った。ベムは胸部に銃弾を受けていた。先ほど祐子がエネルギーを注入するまでは呼吸が細く脈も弱っていたが、意識が戻り危機的状況は脱しているようだった。祐子はベムの胸部に巻き付けられている古い服を破ったような布を剥ぎ取った。布は血で赤く染まっていた。

「*****」(ベム、動かないでね。今あなたの胸を治療するから) 祐子はベムのシャツの胸を開けた。そして透視を行った。弾丸が貫通して胸膜が破れ、右の肺が外気圧で小さくなっていた。祐子は先ず胸膜の穴を塞ぎ、壊れた肺細胞に繋がっていた気管を塞いだ。ダメージを受けた肺細胞を除いて左肺の機能は回復し、気胸の状態を回復させることができた。祐子は肺と胸膜の間の空気が抜けてゆくように肺を取り巻く細胞達に働き掛けた。空気はみるみる抜け、左肺の形が元に戻ってきた。ベムの呼吸は次第に深くなってきた。ベムは目を開け身体を起こそうとした。しかし祐子は許さなかった。

「*****」(もう大丈夫よ。ベム、まだ暫くじっとしていてね)
周囲を取り巻いていた者達は驚いて言葉を失っていた。ソニアが既に消えてしまったジミーとベムの傷口の周辺に残っている血痕をアルコールを染みこませたガーゼで丁寧に拭き取った。マリーが祐子に言った。

「*****」(ママ、5人のチェックインは済みました。ジミーとベムの分をチェックインします)

マリーは祐子に部屋の鍵を渡しながら言った。メドリスナとアルフォン、ソニアも鍵を受け取った。ソニアはまだジミーの側に居たいようだったが、マリーに促されて荷物を手にすると、呆然と突っ立っている人々の間を縫うようにして、2階の部屋に荷物を運び始めた。マリーはまごついているホテルのフロントマンを促して、共にカウンターに戻った。

「Excuse me. My name is Joseph Mcmaran, an officer of UN. I' m sure you would be Mama-Yuko, the president of Furuma?」(失礼致します。わたくしは国連事務次官補のジョセフ・マクマランと申します。あなたがフルマ社長のママ・ユウコさんでいらっしゃいますね?)

白人の背の高い方の男が祐子に近付いて来て言った。祐子は振り返った。途端に意識がホテルのロビーに戻った。

「Yes, my name is Yuko. Did you see our activity? These wounded people are my fellow guards.」(はい、私が祐子です。ごらんになりましたか? 怪我をしていたのは私を護衛してくれている者達です)

「We could see your valuable action. They say you have tremendous super natural power. We had a strong impression of it. We are staying here from yesterday as an advanced guard of the UN Secretary-general.」

(大変なものを拝見させて頂きました。あなたがすごい神通力をお持ちと聞いていましたが、それを垣間見た気が致します。私たちは事務総長の先行隊として昨日からここに宿泊しています)

3人の日本人が立ち上がって、ポケットから名刺を取り出し、祐子に近付いて来た。

「Excuse me. May I ask you something?」(失礼します。ちょっとおたずねしてもよろしいですか?)

「Yes, You may.」(はい、どうぞ)

祐子は応えた。日本人の中の最年長の男性が言った。

「How do you do. My name is Takeo Miyaguchi, the representative of Japanese Government. You would be Mrs. Tugunshou, wouldn't you?」

(初めまして、私の名前は日本政府代表の宮口健夫と申します。あなたがツグンショウ夫人でいらっしゃいますか?)

ツグンショウ婦人と呼ばれて一瞬違和感を覚えたが、祐子はにっこり笑ってそのまま英語で応えた。

「Yes, I am.」(はいそうです)

宮口はまだ話したそうだったが、国連から来た4人が間に割り込まれて不愉快そうに凝視していたので、3人は名刺を渡すとそそくさと引き下がった。ジミーとベムが起き上がった。ふたりは祐子の足下に睨いた。

祐子は言った。

「*****」(もう大丈夫なの?今日は無理をしてはだめよ。さあ部屋に行ってゆっくり休んでくださいね)

祐子の優しい言葉に、ふたりの兵士の目が潤んだようだった。マリーが持って来た鍵をふたりに渡した。ふたりは立ち上がって鍵を手にする、荷物を運んでいるメドリスナとアルフォンを手伝おうとしたが、祐子がそれを止め、マリーにふたりを部屋に連れて行くように言った。祐子はロビーの隅の方に立っているムドルムング、リゲンズ、ダガバの3人の所に行った。

「*****」(ありがとう。あなたたちのおかげで、私達は無事このホテルに辿り着くことができたわ。あなた方もこのホテルに宿泊できるかしら?)

「*****」(いいえ、仲間が外で待っています。これからこの近くのアジトに行きます。ユウコ隊長、この携帯電話をお渡ししますので、何かあったら連絡してください。直ぐにはせ参じます)

ムドルムングは古いタイプの携帯電話を祐子に渡した。

「*****」(ありがとう。それはとても心強いわ。共にこの国が良くなるまで頑張りましょう)

祐子はムドルムングに10万フランを渡し、それで夕食を摂るようにと言った。ムドルムングは力強く頷いた。

ジョセフ・マクマランが3人の仲間と一緒に祐子の所に近付いて来て言った。

「Could you have time to talk with us in the restaurant later?」（後ほどレストランでお話できますか？）

「Yes we can. After dinner, OK?」（はい、夕食後でいいですね?）」

祐子は4人に軽く会釈すると、直ぐに部屋に向かった。部屋に入ると、既に兵士達が全ての荷物を部屋に運んでくれてあった。祐子は直ぐに賢にテレパシーで話し掛けた。

「あなた、亜紀の身体はどうなりましたか？無事日本に着きましたか？」
賢は直ぐに応答した。

「祐子、亜紀の身体は俺の寝室のベッドに横たえてある。俺はもう一度霊界に戻って亜紀に会ってくる。何か伝えることは無いか？」

「亜紀には、私たちが無事ホテルに着いたと伝えてほしいわ。さっき国連の事務方にも会ったわ。明日は事務総長に会うことになっているの。予定通りに推移していると伝えてほしいわ。あなた、亜紀の記憶や思考は現象界に居たときの通りなのですか？」

「亜紀は自分自身を構成している要素については、自分では意識していないが、その全ての要素を自分の意志でコントロールできるようだ。無意識に過去の記憶をアカシック・レコードから引き出し、思考は自分を霊界に引き戻して元の状態を維持しているようだ。亜希子に会ったら、一度祐子の部屋に行くから、そこで君たちのやろうとしていることのために、俺が何をすれば良いのか説明してくれないか？」

「ええ、お願いね。あなたのこと待っているわ」

マリーから電話が掛かってきた。全員が荷物の整理が済んだのでレストランで食事をしてはどうかと言った。

10分ほどして全員がレストランで顔を合わせた。兵士達はそれぞれ銃の入っていると思われる袋を持参していた。ソニアは救急箱を抱えていた。全員の顔に疲れが表れていた。2人のウェイターがテーブルを寄せ

て8人掛けの席を作ってくれた。祐子が席に着くと、それを待って全員が席に着いた。ジミーとベムの間にソニアが座った。

「*****」(皆さん、ご苦労様でした。ジミーとベムには大変な思いをさせてしまいました。みんな頑張ってくれてありがとう。今日は自分の好きなものを頼んで、食事を楽しんでね。ジミーとベムは傷口が完全に回復するまではビールを飲んじゃだめよ。他の人は何を頼んでも良いわ。みんな食事が終わったら部屋に戻って疲れを取ってね。明日は国連の事務総長との会談だけだから、皆さんはのんびりしててくださいね)

全員の顔が多少ほころんだ。食事の間の会話は、もっぱら戦闘の時の話題だった。ジミーとベムの話す敵と対峙したときの話に皆聞き耳を立てた。その時の恐ろしさと、最早これまでと諦め掛けたときに急に敵がバタバタと倒れ始めた様子をジミーが話すと、皆頷きながらジミーの話に釘付けになった。ソニアはジミーの顔を覗き込むようにして聞いていた。しかし、話が亜希子の事に移ると、皆一様に涙ぐんだ。亜希子は祐子達が敵に拉致されるのを阻止しようとして空中飛行をしたのだということが分かったと、ソニアとマリーの頬を涙が流れ落ちた。祐子は胸に悲しみがこみ上げてきたが、じっと堪えた。祐子は「亜希子は必ず戻って来る」と自分に言い聞かせ、必死になって心を落ち着かせた。

食事が済むと祐子とマリーそして護衛としてメドリスナを残し、全員が部屋に戻って行った。祐子はマリーに言って電話でジョセフ・マクマランにレストランで待っていると告げさせた。程なく4人の男達がレストランに入って来た。席に着くとジョセフが言った。

「*****」(お疲れの所、無理な願いをして申し訳ありません。今晚事務総長もホテルに入ると思いますが、事前にママユウコにお伝えしておきたいことがありましたので・・・)

「*****」(分かりました。どういうお話でしょうか?)

「*****」(現在国連にアフリカ救済同盟という組織が出来たのはご存じですか?)

「*****」(はい、知っております)

「*****」(この組織は、建前上は貧困国に対してその国の政府を通じて、その国の国民を救済するというものですが、実際には各国政府との調整による国連軍などの支援には重きを置かず、客観的に見てその政府の存在が国民の生活を苦しめていると思われる国を民間レベルの救済活動を通じて立て直そうとするものなのです。自国の利益のためではなく、真にアフリカの貧困国の救済を意図する国々による同盟なのです。ですからこの同盟の真の目的に賛同している国はそれほど多くはありません。例えば、あなた方フルマが拠点を持つルワンダも、この同盟に加盟していますが、実際はその背後にある活動母体がルワンダなどの自国の利益を意図してアフリカ諸国に接近している国を除外して、表立った会合とは別に秘密の会合を持っています。秘密の会合に参画している国の中にも、真にアフリカを救おうとしている国家はほんの数カ国だけです。お互いに何処の国が参画しているのかも知らずに活動することになっています。勿論秘密の会合に出席すればその話し方や、メンバーの顔立ち、使う言葉などでおおよそ何処の国かは判別が附いてしましますが、お互いにそれは知らないことにして話し合いを続けています。その秘密会合の席であなた方の組織がクローズアップされたのです。ご存じのように世界中には様々なNGOがあります。その中にはNPOとして本当に献身的な奉仕を実行している組織が沢山あります。しかし、彼らの活動が本当にアフリカの貧困国に暮らす人々の役に立っているかという、必ずしもそうとは言いきれません。救済のための活動、資金援助はその殆どがその国の政府を介して為されなければならないため、支援の大半は仲介される政府関連の組織の中で消えてしまいます。その足枷になっているのが、他ならないその貧困国の政府自身なのです。国連としてはそれを表沙汰にしてその国を避難し、同時に支援することは難しいのです。それで表立った活動を差し控えることにしました。秘密組織化したこの活動のことを、我々はアフリカ救済同盟の略称NGAFA(ンガファ)に対し、真実という意味REALの頭文字2文字を付けてReNGAFA(レンガファ)という活動名で呼んでいます。現在までにンガファに加盟している国は120カ国、その内レンガファに加盟し

ている国は7カ国です。日本はその中でも最有力な国家で、最も多額の資金を拠出することになっています。唯、ンガファへの拠出と両立させるのが難しいようです。ですからンガファには政府が協力し、レンガファにはNGOが協力するような形にせざるを得ないので、レンガファはそれほど大きな資金を確保することはできません。それで、我々は資金援助だけでなく、何か打開策を模索しているのです。そんな中であなた方フルマの活動がレンガファの注目の的になったということです。事務総長はその役責の手前、ンガファの立場からフルマの活動に附いて打診すると思いますが、その背後にレンガファの活動意図が含まれていることを意識して説明してください。勿論事務総長も陰でレンガファの活動をバックアップしていますから、その点は安心して頂いて結構です) 祐子は自分達の考えている計画をどの程度まで説明すべきか迷ったが、直感に任せるのが最も良いとの考えに至った。そして、今は具体的な話をするときではないと感じた。全ては事務総長の居るところで話そうと心に決めた。

「*****」(私達もアフリカの国々をどのように救ったら良いのか思いを巡らせています。それには、やはりアフリカに住む大統領から子供まで全ての人たちが愛の心を持ち、欲望や激情に流されて行動しないような環境を造るのが大切だと考えています)

ジョセフも頷いた。それから暫くの間話をしたが、祐子はウグングと取り決めた作戦の核心に触れる部分については一切触れなかった。

部屋に戻ると祐子は直ぐにシャワーを浴びた。身体が汗と埃ほこりでべとついていた。シャワーからは久しぶりに透明の水が流れ出てきた。祐子は身を清められる思いがした。祐子は上着から下着まで衣類をすっかり着替えた。マリーがホテルに頼んでくれたのだろう。ホテルマンが蚊帳を持って来てくれた。バックパックをチェックしてみると、アイリーンからの手紙が届いていた。事務総長とサスカブの会談はうまくいったと書いてあった。スバハが風邪を引いてしまったと書かれていた。祐子は直ぐに瞑目し、スバハに遠隔治療を施した。空間からエネルギーを吸入し、スバハに注入した。それからアイリーンに返事を書いた。自分達が

艱難の末、何とかホテルに到着できたので、明日の会談は予定通り行えることを告げ、そのことを紙に書いてウグング宛てに転送してほしいと認めた。最後に愛する妹を喪ったことを説明し、亜紀の冥福を祈ってほしいと書いてから、手紙をバックパックに収めた。祐子は再び瞑目し意識を賢に向けた。賢の意識と繋がったが、どうやら賢の意識は現象界を離れているようだった。

「由宇、今亜紀と話していたところだ。亜紀にテレパシーを送ってみたいなか？」

「あなたね。今どこに居るの？」

「亜紀と会っている。亜紀はご両親と一緒に住むことになった。こちらの時間では住み始めてもう1月になるようだ。現象界と時間経過が異なっているから、ちょっと混乱するかも知れないけどね。亜紀に意識を集中して、話し掛けてごらん」

祐子はドキドキした。亜希子を思い、意識を集中して話し始めた。

「亜紀ちゃん、ごめんね、あなたが私のことを心配してあんな危ないことをしてくれたのは、私を守ろうとしてくれたからね。私ももっと注意すれば良かった。とっても悔やんだわ。本当にごめんなさい。私はあれから危ない目に遭いながらも、みんなに守られて何とかホテルに辿り着いたわ。明日は待望の国連事務総長とお話しできるわ。亜紀ちゃん、撃たれた時は痛かったでしょう？落ちたときの傷はもう痛く感じなくなったの？あなたが居なくなってしまうと、私は本当に寂しいわ。でもね、いずれあなたに逢えると信じているの。何時、何処でかは分からないけど、必ず逢えると思っているわ。亜紀、あなたのこと一番愛しているわ」祐子が心の中で語り掛けたが、何の応答も無かった。賢からテレパシーの連絡が来た。

「由宇、君のメッセージは亜紀の意識に届いたよ。しかし、亜紀がいくら意識を集中しても君には亜紀の言葉が通じないようだ。現象界から霊界には意識が届き易いが、霊界から現象界に向けての通信は難しいようだ。由宇が俺と通信できるのは俺の肉体が現象界にあって、銀線で繋がっているからだろうな。亜紀は意識で君の声を聞いて涙を流した。感

情が高まってきて、危うくこの霊界からも消えてしまいそうになったよ。俺が必死に亜紀の意識を霊界に繋ぎ止めた。亜紀も由宇の事を最も愛しているようだ。少ししたら、君の部屋に移動するから、待っていてくれよな」

30秒ほどして賢が祐子の部屋に姿を現した。祐子は賢の現れるのをじっと待っていて、空間に賢の姿が現れると目に涙があふれ出してきた。賢の身体が現象界に定着し、目を開いて祐子を見詰めると、祐子はいきなり賢の胸に飛び込んだ。これまで止まっていた賢への愛の感情が怒濤の如くに噴き出してきた。賢も祐子の身体を自分の身体に感じて強く祐子を抱き締めると、あの門前仲町に居た頃の祐子を思い出した。ふたりは感情を解放した。身に付けているものを全て脱ぎ捨てると、もつれるようにしてそのままベッドに倒れ込んだ。賢は祐子に強く口づけした。祐子の肌は焦げ茶色に染められた部分が殆ど剥げ落ちていて、あちらこちらに大きな黒子ほくろのような島を残していた。乳房と腰の部分はくっきり白く浮き出ている。乳首は以前とは違い大きく、乳飲み子を育ててきたことを物語っている。賢の身体はあちこちに縫合の跡が残っていて、既に以前の均整のとれた肉体ではなくなっていた。賢は祐子を愛撫した。祐子は賢にしがみついた。ふたりは無言で激しく求め合った。祐子のはち切れるほどに膨れあがった悲しみが、愛の嵐に変化して賢を求めた。ふたりは思考も感覚も、感情も、心も、全てが消えて、1つになり、爆発しそうな大歓喜の中に満たされている状態が続いた。賢はその喜悅の中に亜希子の意識を同時に感じた。祐子は自分が同時に亜希子であるという意識に包まれた。1時間も経過したのだろうか、祐子の意識が恍惚状態から現実に戻って来た。賢もそれに同調した。

「あなた、やっと逢えたわね」

「どのくらい経ったのかな、祐子」

「ずーっと、ずーっと昔の事よ。あなた、もう一度強く抱いて」

ふたりはまた激しく求め合った。祐子は賢と永遠に1つという感覚で強く結ばれていた頃のことを、大分昔のことのように感じられた。これまで様々なことがあった。今は多くの存在の意識が自分の中に流れ込んで

きている。「この自分の中にいるのは、自分自身のもう一つの現れでもある賢という存在だ」という感覚が身体の細胞1つ1つに至るまで、痺れるように広がっていた。